岸田　智子（40歳／兵庫県西宮市）

災害支援ナース派遣の要請に、気仙沼市で延べ30日にわたり支援活動をされました。避難生活が長引くことにより発生する心と体の問題に、市の職員やボランティアと共にきめ細やかな対応をされました。

●推薦者　社団法人　兵庫県看護協会●

受賞にあたり

東日本大震災から1年が経ちました。被災地の方々のこの1年のご心痛を思うと計り知れないものがあります。

17年前、兵庫県も未曾有の災害を経験しました。あの時には災害に対しての心構えも低く、発災後の対応の仕方もわからず、ただただ困惑をしていたことを思い出します。

この教訓を活かし、同じような状況を作ってはいけない、という心情のもと兵庫県看護協会からたくさんの支援ナースたちが、今回の東日本大震災の支援に入らせていただきました。

私は5月初旬、気仙沼市の鹿折中学校の体育館で、被災者さんの支援活動をさせていただきました。発災当初は500人以上の方が避難されていたと聞いています。2ヶ月が経って200人と少なくはなっていましたが、体育館という生活をする環境ではないところでは不便もあり、しかしそれに対して文句を言われる方もなく避難されている姿にどうにかしないといけない、との思いがありました。

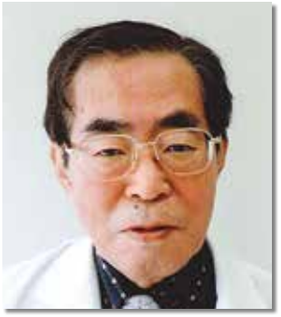
しかし災害サイクルに照らし合わせてみると、発災2ヶ月を経過する時期は慢性期に入っており復興にむけた準備段階であるはずなのですが、今回はあまりにも災害の規模が大きく、また地震だけでなく津波被害、地震後のコンビナートの爆発による大規模火災と災害の種類は多種であったため急性期が長く続いている状況でした。

自分の目の前で家族が津波で流された方、自分の目の前で家が押しつぶされた方、爆発による飛び火で自宅が延焼された方…。お話を伺っていると私が援助できることはあるのだろうか、と悩んでしまう場面が多々ありましたが、「被災者の気持ちは被災者にしかわからない。自分たちのことは兵庫県の人がよくわかってくれる」と感謝されることがあり、労っていただけることがよくありました。

果たして、私がどのくらいお手伝いができたかはわかりませんが、その後6・7月とのべ30日に渡り鹿折中学校で活動をさせていただき、みなさんに受け入れていただき、声をかけていただきました。

今回は、阪神大震災とはまた違う災害のあり方を考える機会となりました。私が、今やらなければいけないことは被災地の現状を地元に伝え、遠隔地からできる支援がないか情報を共有することと、今回の経験を活かし、明日くるかもしれない災害に備えた防災・減災のあり方を考え実行することだと考えています。

今回、兵庫県看護協会から派遣された支援ナースの代表として、授賞させていただきとても感謝をしています。ありがとうございました。



本郷　忠敬（70歳／宮城県岩沼市）

岩沼市の救急医療対策委員長として采配を振るい、ご自宅での診療をいちはやく再開。救護所に赴き、搬送される患者や入院患者への対応に当たられました。深夜も専用の携帯電話で、看護師からの相談にも対応をされました。

●推薦者　一般社団法人　岩沼市医師会　会長　森　学武●

震災の記憶

忘れもしないあの日の2時46分。ものすごい揺れにああ宮城県沖地震が本当に来てしまったのだと思いながら、長い揺れの恐怖にただ何もできずおさまるのを待っていました。

患者の避難、誘導、明かりの確保など、取りあえず思いつくこと全て行いました。

落ち着いたころに、海辺に住む従業員の家族の行方の安否、病室の食材の心配。水の、寒さの、停電の、ありとあらゆる不安と闘いました。それでも従業員のすごい団結力に、感心させられたものです

携帯、交通機関、ガソリンのない中でどうにかして通ってくれる彼女たちには、有り難く頼もしく感謝の毎日でした。

被災者も含み19床満室の食事もどうにか工面して出すことが出来、外来の患者さんたちへも通常の診療が出来、少しずつ回復していくライフラインとともに、余裕の笑みがこぼれだし始めました。パソコンの動かない中でバタバタした事務も三日目には通常作業に戻すことができました。

空いた時間に行く対策本部では逼迫した緊張感の中、遺体の数が増え続けていき津波の規模のすごさを実感させられました。

今となっては何もできなかったと自分の非力さを悔いるばかりですのに、この度の受賞は気恥ずかしいの一語です。

お招きいただきまして誠に有難うございました。

佐々木　文秀（69歳／宮城県気仙沼市）

気仙沼市で経営する診療所は、全壊し自宅も流失する中、102歳の父親を背負い避難した市役所で、480名の被災者のため、医療活動を行うと共に、200体以上の検死にも立ち会いました。そして小児科医として親子の不安解消に向けて、40日後には仮設診療所を開設されました。

●推薦者　社団法人　気仙沼医師会　会長　大友　仁●

「東日本大震災を体験して」

大震災から1年が過ぎた。私にとって、最も凝縮した1年であった。あの日、とてつもなく長く大きい地震が収まり、外来に走っていくと、既に訓練通り職員が患者を避難させ、カルテや検査データを2階に運ぶ準備をしていた。私は津波を予想し、102歳の父を自宅の2階に避難させた。しかし妻の「2階では危険」との判断により、車で高台を目指した。

数分後目にした光景は、想像を絶するものであった。海は黒く盛り上がり、大型の漁船や家屋が木の葉の様に漂っていた。よく見ると自宅や蔵は流失し、診療所の1階は外壁のみ残り、2階は辛うじて現状を維持していた。夜になると海上の油に火がつき家々も類焼し、高台も火災の危険があると考えた私は、父を背負って小山を越え、更に瓦礫とヘドロに埋め尽くされた道路を手探りで進み、市役所に避難した。凍えるような寒さの中、新聞紙を体に巻きつけ一夜を過ごした。

翌日は小さいおにぎり半分と紙コップ半分の水の配給があったが、誰一人文句も言わず、他人に分ける人もあり、日本人の気高さを見る思いだった。市役所には知人の医師が避難しており、県警から検死の依頼があったので、2人で現場に行き、既に到着していた2人の医師と共にチームを組んで、以後8日間検死業務に従事した。

広い体育館が忽ち遺体でいっぱいになると、他の体育館に移動し検死するという凄まじい日々であった。私が診ていた兄妹の小さな遺体や多数の知人の遺体も含まれていた。検死中は涙も出なかったが、夜になると、とめどもなく涙が流れ枕を濡らすこともあった。

検死の合間に避難者の健康管理に当たったが、初めは薬も何もない状況の時に、患者さんの手を握り、話をするだけで症状や血圧の改善が認められ、医の原点である手当ての意味を理解した。

町では多くの人々に声を掛けてもらい、大災害で生き残った自分の今後の生き方等諸々のことを考えた結果、診療所の再開を決心した。職員及びその家族すべて無事であったことが、私を後押ししてくれた。多数の人々の支援を受けて震災後40日の短期間で現在地に新診療所を再開できた。

今後、どこかで災害が起こった時は現地に赴き、恩返しをしたいと考えている。当医師会には大友医師会長をはじめ多くの会員が被災したにも拘わらず、私と同様の仕事をしており、その代表の一人として受賞したものと考え、ありがたく頂戴する。

井坂　晶（71歳／福島県郡山市）

双葉郡で医師会長を務める井坂さんは、仮設診療所の立ち上げに尽力され、2500人収容の避難所では一人の死者を出すこともなく活動されました。一時帰宅が許された際には、ビニール袋一つという制限下で医療器具を主に持ち出し、その後の医療活動に大きく貢献されました。

●推薦者　社団法人　双葉郡医師会●

この度は受賞、ご招待を頂き、心から御礼を申し上げます。やるべき事をしただけですので、このような賞を頂くことは、大変恐縮に存じます。

昨年、3月11日の発災に伴い、原発事故の為、双葉郡は今だに進入禁止となっています。富岡町は、3月12日、20Km離れた川内村に避難指示が出され、私は住民共々大渋滞の中、川内村の国保診療所「ゆふね」に入り、直ちに救護活動にはいりました。

しかし、3月14・15日と更に原発の水素爆発が起こり、川内村村民共々、今度は、30Km圏外避難指示のもと、郡山市の「ビックパレットふくしま」に16日に入りました。

17日から、避難民2500人の救護活動のため、富岡町の医師、看護婦、薬剤師5人を集め、ボランティア医療班を結成、8月31日の避難所閉所まで活動しました。

その間、6月の仮設村入居に備え、仮設村診療所の立ち上げの準備も進め、7月から仮設村の住民の健康管理を行っております。

現在は、ボランティアの医師3人と歯科医師一人による診療で、住民の治療、健康管理に勤めております。

沢山の方々のご支援を頂きながら、避難所、仮設村での死亡者は一人もおりません。この場を借りて御礼を申し上げます。

三百一回　朝日新聞

原発避難の町　医師や職員の確保難題

福島県の中央、双葉郡太熊山のふもとにある大玉村。なだらかな斜面に建てられた仮設住宅に、富岡町の大玉仮設診療所がある。1月19日、腰をかがめながら松本井ハツさん（85）が、一緒に暮らす長女のいち子さん（56）に連れられてきた。腰の治療に要介護認定申請の相談のためだ。

昨年暮れに大玉村に来る前は、群馬県内の県営住宅で9カ月を過ごした。エレベーターのない4階のうえ、見知らぬ人ばかりの慣れない暮らし。閉じこもりがちになってしまった。いち子さんは「母は変わった。意欲がなくなっちゃった。一日中ボーッとしている」と話す。

仮設住宅の自治会長、鎌田光利さん（56）によると、19世帯40人が暮らす。130人が65歳以上で、このうち86人が70歳以上。70歳以上の独居世帯がある。

慣れない暮らの仮設住宅での生活に疲れ、富岡町があった浜通りへ帰る日を待ちわびる。昨年9月末に緊急時避難準備区域が解除された広野町だ。

広野町によると、人口5550人のうち、現在町内に定住しているのは260人。前後で解除前と変化がない。町内には現在、診療所1カ所、病院1カ所がある。診療所は通いで、病院は看護師不足のため一部病棟が活用できない。隣の特別養護老人ホームも職員が確保できず、再開の見通しがたたない。高野病院の野村己保事務長（44）は「政府は、規制を解除すれば後は自己責任とせず、民間が人の努力をしても限界がある」と話す。

双葉郡内の救急医療を担ってきた双葉厚生病院（双葉町）の重篤患者救急室（61）は、「私一人でできることには限界がある。年齢のことを考えると、飛び込んでも緩着花火のように一時的でしかない」と話す。

病院は原発から10キロ圏内にある。放射線量が高く、長期間帰宅困難な区域に入る可能性が高い。だからこそ、帰宅が困難な人や帰るまで時間がかかる人、帰りたくない人のために、現実的な対応策を取るべきだと提案する。例えば、医療や介護、商店といった街の機能を持つコミュニティーを、双葉郡の住民が多く暮らす地域に造る――。

「お年寄りの寝たきりだけを頼っていると、帰町してもその人たちがいなければ町から人がいなくなる」と、重篤病院長はうなずいている。（岩崎賢一）

学校の子が、町に戻りたいという希望が多い高齢者を支えるには医療や介護が不可欠で、それを誰が担うのかという問題があるからだ。

○　○

大玉仮設診療所で通い医師を務める富岡中央医院の井坂晶院長（71）は「私ももう卒業していい年。体が動くうちは医療に携わりたいが、富岡町に戻っても看護師らスタッフが集まるかどうか」と悩む。

双葉郡医師会長でもある井坂院長によると、医師会会員の多くはすでに県外の医療機関で勤務するか、医療現場を離れているという。

仮設診療所近くの認知症グループホームのシニアガーデン（定員18人）も富岡町にあった。利用者の鈴木孝子さん（62）は、町に帰ることを考え、避難している町民から介護職員を補充しようとしたが応募はなかった。現在の職員19人のうち6人は避難者の地域の人だ。鈴木さんは「介護施設は若い職員や女性職員が多い。何十年も慣れたところからの通勤は無理。町に帰ったとき必要な職員の確保のためどうしたらいいか」と話す。

○　○

この難しさを示す例がある。昨年9月末に緊急時避難準備区域が解除された広野町の飯塚医師からかかりつけ医だった井坂さんが、福島県大玉村に避難した。

朝日新聞　平成24年3月1日

大玉村仮設診療所を野田総理（当時）が訪問

保健師や看護師とミーティング

木住野　耕一（54歳／福島県二本松市）

ご自身も被災する中、浪江町からの多くの避難者に対し、医療行為が大変困難な状況の中、献身的に対応され、現在も避難者の方々の診療にあたられています。

●推薦者　社団法人　安達医師会　会長　本田　岳●

大震災後の医療活動について

はじめに、あの大震災から早1年が過ぎましたが、私が貴財団より表彰して頂けることになり厚く御礼申し上げます。大変光栄に思うと共に今後も尚一層の精進を積み重ね地域医療に貢献していく決意を新たにしているところです。この機会に震災に際し当院の行なった医療活動の概況を紹介させて頂きます。

平成23年3月11日午後2時46分、三陸沖を震源とするマグニチュード9.0の巨大地震が東日本を襲いました。午後の外来が始まって間もなくのことでしたが、二本松市も最大震度6強の地震を含め今までに経験したことのない大きな揺れが数分ほど続きました。当院の被害は、転落や転倒によって多くの備品や什器類が破損した以外には、建物周辺の陥没と地割れに伴った雨樋や側溝の破断などが主なものであり、幸いにして建物本体に損害はありませんでした。また医療機器にも損傷はなく、断水や停電も免れた為に震災後も診療を継続できる最低限の条件は保たれました。しかし震災直後より食料やガソリンなどの物流が途絶え、避難所への退避を余儀なくされ出勤できなかったスタッフもいて、いつ休診に追い込まれるか分からない切迫した状況でした。

木佐野さんのクリニック
体育館側からの眺め

当院がその様な状況にあった3月15日、二本松市が浪江町民の緊急避難の受け入れを急遽決定しました。今から考えればそれも無理からぬことであったとは思いますが、市側からは避難者の受け入れに関しての事前連絡や震災後の当院の診療状況に関する問い合わせなどは一切なく、ある日突然目の前の体育館に数多くの避難者が来ていたといった状況でした。因みに当地区での避難者数は、15日に東和第一体育館など5施設に1150人、翌16日には6施設で1245人、翌々日の17日には10施設で1260人に上りました。

浪江町からの避難者でいっぱいになった体育館

3月16日の朝から避難された方々の来院が始まりましたが、当初の3日間は浪江町の方々だけで日に50人から70人の受診者数に達しました。緊急避難であったために多くの方々は、着の身着のままで移動していて、薬を持参して来なかった人や薬剤を持参しても数日分しかない人が大半でした。またお薬手帳のない方や病名も判然とせず、飲んでいる薬の種類さえも把握していない方も数多くいました。また中には精神神経科に通院している患者さんもいて、病状の悪化や悪性症候群の発症なども危惧されました。多くの来院者がこの様な状況であり、病歴聴取、検査や診断、更に処方に至る一連の診療には膨大な時間と労力を必要としました。それと同時に地元のかかり付けの患者さんも受診していたので、院内は騒然とした雰囲気に包まれました。

東和生きがいセンター内に臨時診療所が開設された

この様に大変厳しい状況下で診療を続けていましたが、3月19日から道路を挟んだ向かい側の東和生きがいセンター内に、臨時の津島国保診療所が開設され、所長である関根俊二先生が、診療を始められるとの事前連絡があり、当院にとっても大変有り難いお話でした。当地を選ばれた理由としては、当初二本松市の東和支所内に浪江町役場が、臨時に移転して来たことや当該センターが東和第一体育館や文化センターと言った大きな避難所に隣接していたことが挙げられます。またこの臨時診療所では、浪江町で開業されていた数名の先生方も診療に協力して下さいました。予定通り19日に臨時診療所が開設され、診療が開始されたのを機に当院への避難者の方々の受診は徐々に減少し、3月末には1日当たり15名ほどとなり一応の落ち着きを取り戻すことができました。

臨時浪江町役場

今回の緊急事態に際し、道路を挟んで隣接する2つの医療機関が円滑な診療を行なう為に、診療所長の関根先生をはじめとして、地元の二本松市議や浪江町の保健師などの担当職員及び二本松市東和支所の避難所の担当者などを交えた協議の場を持つことになりました。協議は連日のように行われましたが、その中では両医療機関への患者さんの振り分けの方法や薬剤の処方日数に関しても協調していくことなどが話し合われました。

また診療以外でも協議を通じて、食生活や住環境など厳しい避難所生活を考慮し、感染性胃腸炎やインフルエンザなどの発生防止に関して、可能な限りの対策を講じました。その一環として、そのような感染症の患者さんの為の隔離場所も設置しました。更に震災に関連したPTSDやその後の避難生活によって生じた様々な障害に対処する為に、保健師さんに避難所を巡回してもらい、精神的なケアの必要な方などの発見に努め、必要に応じて早い段階からの専門医療機関への受診につなげました。

その他にも我々の医療活動と並行して、安達医師会をはじめとして地元の基幹病院などの医療機関に対して、救急患者や入院患者の受け入れなどに関する協力の要請を行い、総合的な医療環境の整備を図りました。各機関からは快諾が得られ、病院などへの患者さんの紹介や入院も円滑に運びました。安達医師会からは避難所を巡回する医師の派遣があり、また協力の申し出のあった日本赤十字社やNPO法人難民を救う会の方々には、避難所での支援活動に参加して頂きました。

4月16日、浪江町民の方々の岳温泉等への再避難が完了したのを機に、臨時診療所も岳温泉の宿泊施設内に移転しました。それによって震災直後から約1ヶ月間に亘り続けてきた緊急の診療体制にも区切りが付き、当院は震災前の診療態勢に戻りました。しかし、その後も当地での避難生活を続けている多くの方々が、受診されていて少しも癒えない震災の爪痕の深さを痛感する日々が今も続いています。

今回の大震災では、地震だけではなく津波や原発事故で甚大な被害を被った地域や医療機関が数多くありました。また緊急避難を余儀なくされた浪江町の方々に直に接し、その苦難の大きさは計り知れないものであることを実感しました。それからすれば当院の置かれた状況は、それ程過酷なものであったとは言えません。しかし一月ほどの短期間でしたが、放射能問題に加え頻発する余震や物資の欠乏といった経験したことのない緊迫した状況下での診療には、多くの困難が伴いまた忍耐を要しました。

おわりに、今回の大震災に際し、当院のスタッフは献身的な働きを見せてくれました。しかしそれに加えて各方面、各位のご協力とご支援があってはじめてこの難局を乗り越えることが出来たことは言うまでもありません。この場を借りてご協力頂いた関係各位の皆様に深く御礼申し上げます。

菅野　和治（59歳／福島県二本松市）

停電・断水、そして医療品が不足する過酷な状況下で、双葉郡浪江町からの大量の避難者への対応にあたり、現在も診療を継続されています。

●推薦者　社団法人　安達医師会　会長　本田　岳●

3・11東日本大震災、僻地診療所での経験

この度は、東日本大震災後の大変厳しい状況下において苦労された、数多くの方々がおらる中、小生ごときが、受賞者の仲間入りをさせて頂きましたことには、大変恐縮しております。

当診療所は、二本松市の東部、国道459号線沿い、原発事故後避難区域となった浪江町との境界から約10km、原発から半径約39kmに位置する僻地診療所です。私は、診療所に赴任以来、約15年8ヵ月の平成23年3月11日に東日本大震災に遭遇し、かつてしたことのない診療を体験しました。

震災後、浪江町から避難されてきた方々（二本松市に約3000人）の一部が、送迎バスで（一度に30人～40人）診療所へ受診され、狭い待合室は混雑しました。当院ただ一人の医療事務は、出先からの交通手段が途絶え帰宅不能となり、残る看護師2名で、受付、診察介助、調剤、会計を分担し診療を続けました。

津波で全てを失った方、原発事故による避難命令で家族ばらばらの状態で受診された方、常備薬も持たず、着の身着のまま受診された方々がおられ、お話を伺っては返す言葉も出ませんでした。

病歴聴取し、持参されたジェネリック薬を調べたり、診察時間も普段の数倍を費やしました。年度末で薬の院内在庫も少ないうえ、電話、FAXが不通のため卸との連絡が取れなかったり、ガソリン不足から配送不可との連絡があったりで、降圧剤一人3日分の処方でお帰りいただいたこともありました。

待合室のTVからは原発の水素爆発の映像が映しだされ、横目で見ながら、今後どうなるのか不安はありましたが、目前の業務をこなすのに精いっぱいで自らの避難など考える余裕すらありませんでした。

職員一同昼食抜きで診療を終えた日もあり、診療後も私はガソリンの心配から、診療所に泊まることにしました。（以後3月末まで泊まりは続きました）診療所の周辺で食糧や着替えの調達できるところはなく、スタッフや近所の方からおにぎりをいただき、しのぐことができました。

3月末になると避難所の更なる移動があり、ガソリン、電話の復旧等により、状況は改善、普段の外来診療、在宅訪問診療の日々が戻ってきました。この間1日も欠けることなく（自宅半壊のスタッフもおりましたが）頑張ってくれたスタッフには感謝です。

現在も仮設住宅や借り上げ住宅から受診される方もおり、その不自由な生活や放射線汚染の問題などで心身共に不調を訴える方もおります。長期化すると思われるこれらの問題をかかえた住民たちに、微力ではありますが今後も寄り添っていきたいと思います。

診療所の外観

勤務先の診療所

診療中

石井　正（48歳／宮城県石巻市）

2008年に病院災害対策マニュアルの全面改定をされたことにより、震災時には職員が効率的に行動することができました。また宮城県災害医療コーディネーターとして、機能不全に陥った役所に代わり、避難所の環境調査や、全国から駆け付けた医療チームの陣頭指揮をとられました。

●推薦者　社団法人　宮城県医師会　会長　嘉数　研二●

このたびは、このような名誉ある賞を頂き、大変恐縮している。

僕は、地方病院に勤務するごく平凡な外科医なのだが、その勤務地が東日本大震災の最大被災地である石巻であったため、たまたま成り行きでその石巻の災害医療救護活動を統括することになった。

その活動内容を端的に言うと、

1）石巻医療圏に入った全国からの医療救護チーム（日赤救護班、医師会、大学病院、自治体病院、総合病院、NPO、自衛隊医療班、薬剤師会など）を一つの組織として組織化し、「オールジャパンチーム」ともいうべき「石巻圏合同救護チーム」を立ち上げ、のべ3633チームの救護チーム活動を一括運営・調整した。

2）自ら圏内の最大328ヶ所の避難所の情報収集を継続的に行い、医療ニーズを的確に把握しながら、衛生環境改善や要介護者対応など、時には医療を超えた活動も行った。

3）急性期を過ぎて慢性期に入ると、打撃を受けた地元医療が再生するまで医療支援を継続し、地元医療にシームレスに引き継いだ。

ということである。

これらの活動が評価されたのだと思うが、あえて申し上げたいのは、僕一人の力で活動していたのでは決してない、と言うことである。

僕らの活動は、医療者のみならずあらゆる組織、業種、立場の人々が集まり、震災と戦ったのであり、僕は参集したこうした「善意の人々」が一つの方向に向いて最大限活きるよう交通整理をしただけである。その「交通整理」についても、様々の組織（地元医師／歯科医師／薬剤師会、東北大学、当院、日本赤十字社など）の全面サポートがなければ到底不可能であったと思う。

また今回の受賞の知らせを頂いても正直、「やったー」という気持ちにはなれなかった。なぜなら、もしも東日本大震災が起きていなければ、被災地など存在しないわけであるから、今でもこの震災の被災地では何事もなく皆平穏に暮らしているはずで、震災が起こらなかった、すなわち僕の受賞根拠が消滅し、従って受賞することもなかった状況の方がはるかによいと、心の底から思うからだ。

しかし現実には東日本大震災は起き、結果としてこのような立派な賞を頂くことになった。だから被災地の思いをしっかり受け止め、浮かれることなく、次の災害の減災に少しでも役に立つように僕らの経験を広くあるいは次の世代に伝えていき、この悲しい体験が無駄にならないよう今後もできる限りのことをすることが僕の責務であると思う。あらためて、身の引き締まる思いである。

打ち合せの様子

簡易水道が設置されたとき

全国からの医療救護チームの指揮をとる石井さん

小松　孝男（65歳／宮城県気仙沼市）

気仙沼市で平成21年に開業したばかりのクリニックが全壊したにも関わらず、翌日から医療救護活動に従事し、自宅を拠点に避難所17か所を担当。連日徒歩で巡回診療や薬剤の調達に奔走されるなど、被災者に寄り添った医療活動に当たられました。

●推薦者　社団法人　気仙沼医師会　会長　大友　仁●

この度は貴財団より思いがけない表彰を賜りまして、身に余る光栄であり、また今後の励みになるものと、厚く御礼を申しあげます。

東日本大震災で私の診療所は全壊し、跡形もなく流されてしまいました。地元出身の医師として自分に出来る事は医療を通じて被災された皆さんのお役にたつしかないと思い、翌日から看護師を同伴して巡回を始めました。

当初、私は「故郷なのだから…俺がやらなければ…」などとやや高揚していて、ガレキやヘドロで埋め尽くされた道も苦にならず、長い道のりを歩きました、

避難所は水もない、電気もない、車もガソリンもない、薬も手に入らず、支援者も足りず、途絶された過酷な状況でした。災害直後の被災者は、茫然自失、「頭の中が真っ白」といった震災による直接的な精神的打撃を受けましたが、時間が経つにつれてそれが減少し、最近では生活環境ストレスが増加しております。生活環境の変化で、うつ病や引きこもり、アルコール依存、心的外傷ストレス障害（PTSD）が大きな精神医学的問題となってきております。

私は日本のみならず、世界の多くの人々からの心温まる励ましと、御支援のおかげで、震災2ヶ月後に内陸側に移転して仮設診療を再開することができました。一年後には、改築工事か終了し、現在通常通り診察しております。日常診療を通じて、また「宮城心のケアセンター」や気仙沼医師会の「出前こころの健康セミナー」の一員として、地域住民の「心身の健やかな毎日」を目指してお手伝いをしております。

心のケアは総合的な生活相談の一部でもありますので、今後、安心して住める所、そして安定して働ける所が確保されて、1日でも早くぐっすり眠れる日が来ますように、継続して微力を尽くしていく所存でございます。

世界中が我々の復興の様子を注目しております。完全復興までは険しい道のりでありますので、今後とも、ご指導と御力添えを賜りますよう宜しくお願い申し上げます。

被災者の悩み少しでも軽く

気仙沼の心療内科医・小松さん

診療所失いながらも…避難所を往診

東日本大震災で被害を受けた気仙沼市鹿折地区で、心療内科医が避難所を往診して回る。地元の小松孝男さん(64)。自身の診療所を失い、処方できる薬はない。それでも「少しでも心をほぐしたい」と、体調不良を訴える被災者と向き合っている。

11日の津波の来襲。小松さんは看護師らと避難して難を逃れた。ただ、2年前に勤務医から転じ、故郷に開設した「地域医療の拠点」は押し流されてしまった。

「被災した患者たちが心配だ」。その一心で翌12日から避難所に足を運び、自らの患者を無償で診て回った。診療はほかの被災者にも広がり、今では毎日、17カ所の避難所で150人以上の体調をチェックしている。

大切な人や物を失った喪失感で、不眠やパニック発作に悩む人が少なくない。手元に処方薬はないが、日々の会話で変化を見守る。重症患者には、系列医療機関に分けてもらった薬を届ける。

「先生の顔を見ただけで落ち着くよ」と避難所の男性(72)。同行する看護師長浅野美保子さん(56)＝気仙沼市＝は「自分も倒壊した診療所付近を見ると、動悸（どうき）がする。同じ立場だから分かる気持ちがある」と被災者に寄り添う。

「1人で考え込まずに周囲に相談してほしい。周囲も孤立させないことが大切」と呼び掛ける小松さん。診療所の早期再開を心に期するが、今は避難所が仕事場だ。

「避難生活を送る住民がいなくなるまで巡回を続けたい」（高橋鉄男）

避難住民の心のケアに当たる小松医師（中央）と看護師長の浅野さん（右）＝26日、気仙沼市の東陵高

河北新報　平成23年3月29日

診療所の跡　駐車場の白線が見える

避難住民の心のケアに当たる小松医師と看護師
河北新報に掲載された

笹原　政美（65歳／宮城県登米市）

南三陸町で開業していた診療所は自宅とも全壊。ご自身も避難者620人のいる小学校に避難し、そこで救護活動に当たりました。また、医療器具や医薬品の調達に奔走し、入谷地区の避難所４か所に巡回診療をされました。

●推薦者　社団法人　気仙沼医師会　会長　大友　仁●

津波により診療所は、土台を残したのみで流失してしまいました。そして震災直後より避難先の小学校体育館、聴診器一つない状況で医療活動を始めることになりました。

暖房器具はなく、寒さに震えて動けなくなり寝込んでしまう高齢者も多くいたため、一週間後の卒業式のために張られていた紅白の幕を降ろしてもらい、つらそうな高齢者を包み込んで行きました。

医療器具も薬も何もなく私にあるのは医師としての肩書きだけでしたが、それでも避難所では「先生がいると安心」と言ってもらえました。

震災五日後に医療チームが応援に来てくれ、徐々に薬や医療器具が届けられるようになり、持病がありながら薬を持たずに避難した人や薬を流失してしまった人達への診療を開始しました。

一時は千人近くの人達が避難して来ていましたが、インフルエンザや感染性胃腸炎の予防のために手洗い、うがい、マスク着用の指導を徹底し、体育館内の夜間巡回も行いました。

小学校における私の寝泊りでの医療活動は、4月17日まで続きましたが、医療活動の集約に伴い、4月18日より南三陸町仮設診療所で診療に当たることになりました。

診療所では、小学校で診ていた患者さんとは違う広い地域から訪れる患者さんから、被災時の生々しい話を聞くと、冷静に対応できなくなることがしばしばありました。

津波は形あるものを全て奪い去り、人の心まで流失させてしまいながら、無情さと残酷な記憶だけを残していくのです。仮設診療所には、被災後に隣接の登米市に集団移住した南三陸町民も多く来院していたのですが、「南三陸町まで通えない人も多い」との声も耳にしました。患者さんが動けないなら、動ける私が動けばいいと思い、昨年十二月に登米市の仮設住宅の近くで移転再開業しました。

移住先の仮設住宅で厳しい生活を強いられている患者さんに、顔見知りの医者がいることで少しでも安堵感を持ってもらい、癒しになるならいつまでも寄り添って行こうと思っています。

今回、受賞の知らせを受け、多くの人が自分のことのように喜んでくれました。被災した人達の人間としての復興に、お役に立てるよう全力を尽くす大きな推進力となりました。

葛　但寛（63歳／宮城県気仙沼市）

経営する気仙沼市の診療所は自宅共に全壊、流失となり、避難先では火災が発生し一時孤立状態となりましたが、避難所において地域住民への医療活動に従事するとともに特養老人ホームの入所者の施設への搬送診察などに尽力されました。

●推薦者　社団法人　気仙沼医師会　会長　大友　仁●

あの日、大きな揺れの後、迎えの家人を待つ老婦人が一人、しかしまっても来ずさすがにまずいと一緒に病院を出る事にした。しかし時すでに遅く町の中は静まり返っていた。向にあった会館の方が耐震の建物だと誘って下さり、皆でお世話になる事をなった。先に避難していた方達も居り挨拶して二階に上がった時、窓から大型バスや家が流れるのが見え、病院はすでに流失、何が起こっているのかと映画を見ている様でした。

二階にも暗黒色のドロ水が入り畳が浮き、皆でより高い祭壇に登り何を逃れました。水が少しひいた後、皆寄り添い壊れた壁の断熱材で寒さをしのぎました。夜には火のついたガレキが流れては引き、隣の家々は燃え、恐怖の一夜でした。足の痛い老人、退院したばかりの方も居り、皆で励まし協力して過ごしました。

まる一日して自衛隊の救援を受け、ひざ程までひいた泥とガレキの山を残し、やっとの思いで脱出、しかし一昨年から悪化していた背椎管狭窄症が見事にひどくなり一晩市立病院にお世話になりました。その間に聴診器、薬、インスリン等を卸店を通じ集めました。

十八日より、家から一番近い気仙沼高校で具合の悪い方、高血圧をはじめとする生活習慣病等の診察に当りました。持っている老人施設の事もあり緊張が続きました。

仕方のない事とは言え、避難所の食事は糖質に偏りがちで、糖尿病悪化の為、準備したインスリンはすぐ底をつき、日本糖尿病学会に連絡して補充した。私が高校に居る事を知り、いつもの患者さん達がやって来る様になり、新患は東京、富山等の救援隊にお願いし、普段の患者さんへの対応が多くなってしまいました。救援隊の皆さんは熱意にあふれた方々ばかりで、三日程のサイクルで顔ぶれが変わるので名残惜しい雰囲気でした。

そんな訳でとにかく医院を再開せねばと強く思い、物件探し、修復工事、物品調達を急いで買い、4月18日再開となりました。

自分が出来る事、当然の事を行っただけなので、最初、表彰は辞退と思いましたが、結局お受けする事に致しました。この震災で私も少し素直になったという事でしょうか。

多くの方々からの御支援、心から感謝しております。

村岡　正朗（50歳／宮城県気仙沼市）

気仙沼市で開業してクリニックは全壊となり、自身も避難するなかで、避難者1200人のために、保健室で早速医療救護活動に従事、高齢者への往診など、「気仙沼巡回療養支援隊」を結成する等、医療支援に尽力されました。

●推薦者　社団法人　気仙沼医師会　会長　大友　仁●

東日本大震災での避難所、救護活動で感じたこと。

医療活動：私は津波発生時には、高台の避難場所にいて津波の様子を見ていました。直後よりびしょ濡れになった被災者が数人運び込まれ、その対処に追われましたが、濡れた服を脱がせ備蓄されていた毛布等でくるむことで対処できました。他には数人の打撲や四肢を骨折した被災者が来ましたが、あり合わせの物で固定し対処できました。明るいうちに避難所にたどり着き、被災者は比較的元気な人ばかりでした。しかし、被災者は日が暮れるとぱったりと途絶えました。

日が暮れてからは4歳の女の子が、ただ一人びしょ濡れで助け出されてきただけでした。その子は、徐々に呼吸状態が悪くなってきたために、当日の深夜にヘドロの中を気仙沼市立病院へ連れて行きました。後日伝え聞いたところによると、直ちに気管挿管され、レスピレーター管理となりましたが、現在はただ一人生き残った祖母と元気に仮設住宅で暮らしているそうです。

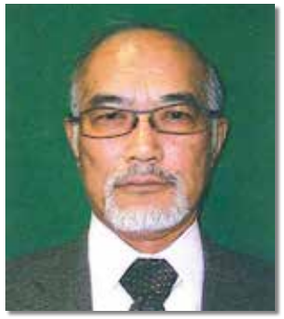
翌日は夜明けとともに被災者が続々と避難所に来ました。翌日のほうが重篤な被災者が多かったような印象です。しかしながら、その重篤な被災者も昼ごろで途絶えました。津波を生き延びてもびしょ濡れで寒かったため、夜のうちに低体温で亡くなったひとが多いようです。また、車での避難途中に津波で流され、そのまま海へ流された人も多くみられました。

12日の午後からは、緊急の治療を要するような人はほとんど居ませんでした。日中、救護所に来る人は普段から服用している高血圧や糖尿病などの薬が流されたなどの人が大半でした。日が暮れてから、救護所に来る被災者は不安感からか眠れない等が大半でした。それも、震災後4～5日目に電気が回復し、電燈がつくようになると激減しました。明るいということのありがたさを痛感しました。

医薬品の供給に関しては、翌日に市内の開業歯科医の方より鎮痛剤と抗生剤の提供があり、また市内の薬局よりOTCの風邪薬、湿布等の提供がありました。慢性疾患に対する薬などは、震災後1週間目くらいからはあふれるように入ってきましたが、それまでは非常に心細い状態でした。この時ほど、お薬手帳等の薬剤情報の重要性を痛感したことはありませんでした。

14日ごろには陸上自衛隊が救護所を開設しました。これは、発電車も持ってきて電気が復旧していないにもかかわらず、レントゲン撮影も可能な診療所テントを校庭に設置したもので、自衛隊の底力を見せつけられた思いでした。震災後、数日からは市民会館には旭川医大の医療救護班、中学校には自衛隊とプライマリケア連合会からの医療救護班が、日中は常駐するようになりましたが、夜間は市民会館、中学校、隣の小学校の避難所を一人で診るという状態は最後まで続きました。

診療中の村岡さん



会長　中村　雅英

福島県警察医会 （福島県福島市）

福島県の警察医会会員の数はわずか40名で半数が60歳以上という厳しい中で、震災発生直後から遺体の検案業務を行い、昨年までに630体の検死に立ち会われました。

●推薦者　社団法人　福島県医師会●

この度の東日本大震災によって、福島県内における犠牲者の数は、平成24年2月末の時点で1,605体であった。そのうち福島県警察医会会員の多くは、震災発生当日の3月11日から発見されたご遺体の検案業務を開始し、最終的には会員14名で全体の約39%に当たる630体の検案業務に携わった。残りの約1,000体の検案は、福島県立医科大学法医学講座の法医学専門医、ならびにボランティアとして駆けつけた全国各地の法医学専門医によって行われた。

特に、福島第一原発周辺の警戒地域での遺体捜索及び死体検案については、福島県警察をはじめ、全国から派遣された警察官やボランティアとして参加された法医学専門医に委ねられたが、この方々の功績も多大なものであった。

一方、本震災による甚大な津波被害を受けた福島県浜通り地区や、ダム決壊、人家を巻き込む崩落被害地区を担当する警察医は、自ら被災したにもかかわらず、各自がその使命感に基づき検案業務に携わった。

本震災発生間もない時期に於いては一度に多数ご遺体が発見されたことから、ライフラインが途絶状態であったにも関わらず、担当地区を越えて検案業務に従事した会員もいた。またその中には、福島第一原発警戒地域内から避難しながらも、検案業務に従事していた会員もいた。

しかし、表舞台に出ることが殆どない検案業務であるが、「人生の最後を大切にしたいという警察医会の気持ちが、社会一般に認められたことにより、この度名誉ある表彰を受けたものと会員一同喜んでいるところである。今後とも受賞に恥じないよう会員一同、医師としての社会的使命を果たすとともに、より一層の社会貢献を行う所存である。

福島県警察医会
会長　中村　雅英

検案業務の様子

公共施設等に設置された仮設の検案会場

代表取締役　宇都宮　博行

宮城エキスプレス株式会社

（宮城県石巻市）

石巻市で鮮魚輸送を行う同社の高台にある整備場は津波をまぬがれ、そこに多数の住民が避難して来ました。従業員総出の救出活動や、流れてきた食料品や保冷庫にあった海産物で200名余りを数日間、引き続き50人余りを1ヶ月にわたり支援されました。

●推薦者　公益財団法人　社会貢献支援財団●

平成23年3月11日、歴史上、経験したことのない大地震と大津波の発生。私どもの会社は、北は岩手県の宮古市や釜石市、南は福島県相馬市まで三陸海岸沿岸部一帯へ、海の幸を運ぶ長距離の運送屋でございます。地震発生時のちょうど14時46分。荷積みも終えて関西・中京・北陸方面のトラックも出発し、お昼にしようとしていた時でした。

当社は、海岸より300mの所に鉄骨3階建の冷蔵庫と事務所があります。冷蔵庫の外壁がくずれ、地震の大きさよりも揺幅が非常に長く感じられ、「これでは津波が来る」と…身の危険を感じました。「すぐに避難しないと」と常務（息子）。とにかく、社員を会社の整備工場兼駐車場（500m先の小高い場所）に各自、自分の車で避難するよう指示を出しました。社内のトラックやフォークリフトはそのまま車庫内に並べて、全員非難することが出来ましたが、一人だけ自宅に帰ったため、津波にのまれ帰らぬ人となりました。

トラックは、大型、中型、リフトを合わせ50台ほど、約1時間後に到着した津波に、社屋、冷蔵庫とも壊滅的に破壊されてしまいました。整備工場に向かう途中は、渋滞し混雑していましたが、なんとか波が来る前に、全員整備工場に、着いたと思いました。

地震から1時間後位だったでしょうか。津波が襲ってきた時は、従業員一丸となり、流されてきた人や車の中から助けを求める人を、腰まで水の中に浸かりながら、15人～20人位は、助けたと思います。高校を卒業し入社したばかりの従業員達が行った、人命救助活動には本当に感謝したいと思いました。避難場所としての高台は、当整備工場しかなかったため、避難者は約200名程いたと思います。身体中ずぶ濡れの人、怪我人、老人、子供と高台から流れる様子を愕然と見ることしか出来ませんでした。

通信機関は途絶え、家族の安否も確認できずただただ身体中震える思いでした。そんな不安の中、私も駐車場内にあるトラックを全部暖を取るために使用するように指示し、トラックの荷台も開放し冷蔵車を暖房にして会社内にある毛布、作業服を着せたり、ドラム缶で火を焚いて過ごすことにしました。怪我人、子供、老人はマイクロバスが1台あったのでここで休ませ、とにかく救護を頼まなければと思い、夜遅く飛んで来たヘリコプターに向かい、皆で携帯電話の明かりで合図をしたのですが、目の前まで来ても救護にきてもらうことが出来ませんでした。

2日目に、やっと自衛隊にて搬送することが出来たしだいです。食事はトラック内にあった冷凍食品や工場の近くにあった食品店のカップラーメンとかで食事をし、水は地下水をくみ上げることが出来ました。200名ほどいた避難者も何とか歩いて家の安否の為に徐々に帰宅していき、避難所の役割を終えるまでに1か月位かかったと思います。

震災から1年になりますが、避難して命を助けて頂いたと御礼に当社まで足を運んでくる人が今でもおられます。

現在の状況ですが、まだまだ復興の兆しが見えて来ているとはいえず、がれきや倒壊した家々の解体が順次に施工している状態です。当社も冷蔵庫と事務所を解体し、5階建の5000tの冷蔵庫とHACCP対応の配送センター設備と、今回の震災を踏まえて防災の避難所、ヘリコプター離着陸用の施設、供養の為に千手観音の供養塔を作ろうと思っています。現在国の補助金を利用させて頂き、3月30日には地鎮祭を執り行うことになりました。今後は、石巻の発展、復旧・復興の為に、震災前以上に石巻ブランドである新鮮な魚介類を、信頼を乗せて全国どこへでも輸送したいと思います。

また新聞、マスコミに取り上げて頂き、私たち社員共々元気で生きていることをお知らせ頂いたことは大変ありがたく、また世界、全国の自衛隊やボランティアの皆様方にこの石巻に逸早く入って頂き、多大なるご支援を頂いた事は感謝にたえません。

この教訓を活かし、命の大切さ、人との絆を後世に語り伝え、当宮城エキスプレス株式会社も絶えることなく頑張っていきたいと思います。ありがとうございました。

宮城エキスプレス株式会社
代表取締役　宇都宮　博行

新社屋の完成写真と共に

一時150人以上が避難先を送った石巻エキスプレスの社屋整備場兼駐車場と同社の従業員ら

長引く避難
150人超受け入れ

津波襲来時
10人以上救出

社員一丸
石巻の運送会社
命つなぐ

河北新報　平成23年6月2日

会長　中澤　哲朗

名取市役所アマチュア無線クラブ

（宮城県名取市）

災害発生直後から市の災害対策本部内でアマチュア無線機を設置。　会員は沿岸部に出向き被害状況や安否情報の確認、避難所と本部の連絡等、公衆通信網が復旧するまで通信手段のかなめとなりました。

●推薦者　高橋　勇悦●

2011年3月11日14時46分、三陸沖を震源とする観測史上最大の東北地方太平洋沖地震（M9. 0）が発生、それに伴い発生した大津波により沿岸部は壊滅的被害となり「東日本大震災」として歴史的にその名を刻む事となります。

名取市は震度6強を記録。地震発生直後、停電になり固定電話が不通、携帯電話がつながりにくい状態になりました（その後携帯基地局バッテリー切れにより不通となる）。当初、通信手段として、避難所に設置していた防災行政無線を利用したが、沿岸部避難所では津波で無線設備が流されしまい、通信手段が寸断されてしまいました。

名取市役所アマチュア無線クラブは、名取市災害対策本部内にアマチュア無線機を設置し、アマチュア無線を使用して情報収集を主に無線通信を開始しました。同時に沿岸部へメンバー数人が赴き被災状況確認、安否確認、避難所との連絡、災害救助活動など、津波で流された防災行政無線の補助的役割でありましたが、極めて緊急を要する情報伝達を迅速に行いました。

連絡手段の無い沿岸部避難所とアマチュア無線にて通信手段を確保し、災害対策本部からの指示や情報を伝達可能にすることで、避難所内の混乱を防ぎました。

さらに市役所庁舎屋上には、名取市内全域から交信可能であるアマチュア無線中継局をボランティア団体（名取市役所アマチュア無線クラブが中心）が設置運用しており、市内のアマチュア無線愛好家で組織する非常通信協力会に協力依頼し、市内の被災状況確認、及び負傷者の有無など確認を行いました。

公衆通信網が途絶していた4日間は、有効かつ機動性に優れた唯一の通信手段としての機能を発揮し、名取市災害対策本部の通信手段として大きな役割を担いました。

震災後、落ち着き始めた頃には多方面から「情報伝達」の重要性が話題になり、新聞にも掲載されました。迅速な対応が可能だった要因は、市災害対策本部内において市職員が非常時における通信手段の確保を行ったこと、地域住民と非常通信ネットワークを構築しており、統制局として連携していたことであります。防災行政無線は同じ自治体同士の連絡しか出来ませんが、アマチュア無線は不特定多数の市民から様々な情報を得ることが可能な通信手段であります。

今後はアマチュア無線の有効性、そして「最後の砦となる通信手段」を市民や各自治体等に伝えるための活動をしていきたいと考えております。

名取市役所アマチュア無線クラブ
会長　中澤　哲朗

使用した無線機

無線を使用する中澤さん

沿岸部閖上地区

災害対策本部

仙台空港周辺

仙台空港周辺

名取市閖上中学校

閖上中学校の教室

責任者　株木　孝尚

被災障害者総合支援本部ＪＤＦみやぎ支援センター
日本障害フォーラムＪＤＦ
（宮城県仙台市青葉区）

震災後、被災した障害者を支援する「みやぎ支援センター」を設立。約5万人以上住む沿岸部を重点に入り、約800人以上の支援員（ボランティア）で安否確認とニーズ調査やそれに伴う支援に取り組みました。個人情報保護条例という壁の中、1,593人の障害者と直接対話し、必要な支援に応えました。

●推薦者　公益財団法人　社会貢献支援財団●

被災障害者総合支援本部みやぎ支援センターの報告

東日本大震災後の3月にセンター開所以来、ＪＤＦ（日本障害フォーラム）傘下の多くの団体から実人数で800名以上の支援員が、全国各地から来県して頂きました。又、多くの法人から資金や車両提供など物心両面にわたり支援を頂きました。この場を借りて心から感謝申し上げます。

「被災障害者を支援するみやぎの会」発足と同時に、ＪＤＦみやぎ支援センターを仙台ワークキャンパスに設立以来、4月末、登米市に北部支援センター、8月に涌谷町に東部支援センターを開設し、エリアを分担し対応致しました。

現在は、新設した「ＪＤＦ宮城」に事務局を置き、ＪＤＦみやぎ支援センターの取り組みを継続し、被災障害者の支援活動を継続しています。

活動は大きく分けて、被災障害者支援事業所の調査と個別ニーズへの支援を行いました。

北部支援センター（気仙沼市・南三陸町）では、交通アクセスの不便さ、移動手段がない等による移送支援が大変多く、見守り支援や福祉作業所の日中活動支援で農作業なども多くありました。南三陸町においては、意見交換を行う場と移送・就労・住まいの状況と課題の共有を目的に、行政を含め、障害者関係団体懇談会を昨年7月から毎月開催しました。この懇談会は、南三陸町自立支援協議会に引き継がれています。

東部支援センター（石巻市・女川町）では、「相談支援」が特に最も多く、続いて「物資支援」でした。女川町では身障の方からの相談が多く、入浴困難や手すりの設置の要望が寄せられましたし、石巻市では、花の苗・種や土の依頼などもありました。又、私営福祉施設における手すりの設置の要望も寄せられました。

女川町においても隔週水曜日を定例として「ミーティング」を設け、12月までに10回開催致しました。海辺にあって事業所が流失し、利用者も犠牲になった「きらら女川」の再興や細かな個別支援についての意見交換を行いました。

次に、見えてきた課題ですが、特に強調したいことは、「被災障害者の正確な実態把握」に関することです。宮城県沿岸部だけを見ると障害者数は手帳保持者のみで5万3千人以上です。この内、支援センターの確認対話人数は、1，593人でした。全国から延べ6，000名以上の支援員の活動があった割には、壁が厚かったことを示しております。

その第一の壁は「個人情報保護条例の問題」がありました。第二の壁は「一般人も障害者も支援は平等にという行政側の姿勢」が見受けられました。障害者だけを対象にした支援活動には協力できないという行政担当者がおりました。

今後の大震災に備えるためには、「支援体制の仕組み」を平常時から構築しておくべきです。支援を受ける側と支援する側との調整が必要です。支援団体が同じ所に多数入り込み、混乱を招き、逆に負担をかける結果を招きました。

今後は、98％の障害者の安否未確認を含め、生活実態の掌握と流失してしまった事業所の再興支援が喫緊（きっきん）の課題です。

支援センター責任者　株木　孝尚

山元町福祉仮設住宅へベッド届け

避難所から引っ越し支援（石巻市）

代表　及川　智

被災地障がい者センターみやぎ
ＣＩＬたすけっと
（宮城県仙台市太白区）

震災１週間後から、自らも障がいを抱える及川代表を中心に、迅速な対応をする為に宮城県内に２か所の拠点を設け、復興を目指す障がい者に寄り添った活動を続けられています。

●推薦者　公益財団法人　社会貢献支援財団●

CILたすけっと・被災地障がい者センターみやぎの活動について

平成24年度「東日本大震災における貢献者表彰」を賜り、謹んで御礼申し上げます。

2011年3月11日の東日本大震災の時、仙台市長町の「CILたすけっと」の事務所で被災。たすけっとは障がい者自身が運営する支援団体で、17年前から障がい者の自立支援活動をしている。

震災当日はガラスが割れるなどの被害があったが、建物の倒壊もメンバーのけがもなく、私も含めて車いすユーザーで避難所へ向かった。しかし避難所は人ごみの中、身動きさえままならず、車いすでは避難できない、支援が受けられないことを身を持って実感したのである。この実体験が、多くの方々とともに支援活動を始めた大きな動機である。

3月中は、全国から集めて届けて頂いた物資を県内の障がい者へひたすら届けた。食品、衣類、オムツ、カテーテル、経管栄養、酸素ボンベ、発電機…障がいゆえに必要な物資に重点を置いた。避難所で経験したように、障がい者だからといって、固有の不可欠なニーズに対応してくれない現状があったからである。避難所、ヘルパー事業所、個人宅。連絡をもらったところにはできるだけ早く届けた。

4月からは、仙台の団体を中心に「被災地障がい者センターみやぎ」（センターみやぎ）を組織した。この組織を立ち上げるにあたって、全国の自立生活センターが加盟する全国自立生活センター協議会（JIL）、DPI日本会議、ゆめ風基金、そしてそれらで組織された「東日本大震災障害者救援本部」の全面的なバックアップを受けている。その後ろには救援本部・ゆめ風基金へ1,000円、2,000円という尊い募金をいただいた寄付者がおられる。センターみやぎの立ち上げに当たっては、日ごろから活動を続けてきた障がい当事者団体間の全国規模のつながりがあった。センターみやぎの事務局はたすけっとが担い、各地から連日10数名のボランティアが活動して頂いた。

障がい者を捜し、お話を聞き、物資提供、介助、手続き補助、必要とされることは、なんでも行なった。体当たりともいえる活動を経て、被災地の福祉基盤の把握とニーズのマッチング、支援拠点の整備などを行なった。その中で浮き彫りになったのは、沿岸部の福祉基盤の弱さと、福祉と障がい者との結びつきの弱さである。

昨年10月頃からは、山元町、登米市、石巻市に沿岸部支援の設けた拠点を中心にした活動に移行している。「復興」へ向けて。私たちが考える「復興」は元に戻すのではない。障がい者が地域社会の一員として、暮らしていけるまちを障がい者も参画し作っていくことである。単純に福祉サービスを拡大するだけでなく、地域社会のつながりの中に障がい者もいる社会である。

登米の拠点は南三陸において、障がい児の放課後ケア、児童デイサービスを開始した。それまで支援を受けられなかった方のレスパイトなど、新たな資源となっている。

石巻の拠点は、初期の物資支援でつながった車いすユーザーがもともと抱いていた「障がいを持つ仲間を支援したい」という思いと、「地域活動をする障害者」を求めていた我々の思いが一致し、当事者活動を中心に石巻の障がい者が再びつながる拠点となりつつある。車いすで地域を闊歩し、少しずつつながりをつくる日々が続いている。

「復興」には10年、20年は優にかかる。その中で障がい者も暮らせる町、地域づくりをしていきたい。

被災地障がい者センターみやぎ　ＣＩＬたすけっと
代表　及川　智

活動中の及川さん

被災状況を確認

理事長　般若　よし子

ＮＰＯ法人　ひまわりの家

（福島県相馬市）

南相馬市にある精神病院が閉鎖となったことから、そこに通う近隣の精神疾患者を支えるため、病院スタッフと協力して、安否や薬の在庫確認、受け入れ先の手配に奔走。炊き出しや作業所での受け入れも行われました。

●推薦者　公益財団法人　社会貢献支援財団●

福島県の相双地区にある精神科の病院、クリニックが平成23年3月原発事故の関係で全て閉鎖しました。

相馬市には、精神科の病院もクリニックもありませんでした。ひまわりの家に通所している人、グループホームで生活している人、約100名もの利用者が、お医者さんがいない、薬をどうしようと、とても不安で大変な思いをしました。

病院の関係者や行政の方々のご配慮で、3月末には臨時の外来ができました。全国から精神科の先生方が相馬市にいらしていただき、診察や薬の処方もして下さいました。

そして、いろいろな関係機関の方々のお力で、今年の1月に精神科の病院がなかった相馬市に、待望の精神科のクリニックができました。震災、津波、原発事故の災害の中、スタッフ一同力を合わせ、協力し合った結果だと思います。

その後、閉鎖された病院に通院していた障がいを持つ人たちが、相馬市に避難して来ました。その人たち8名を、グループホームへ入居受け入れました。

他にも8月ごろに原発の関係で郡山市や

福　祉

逃げ場ない障害者を支える

医療機関、薬も乗っ取られ
不休で活動、職員の命を削って

二本松市に避難していた人たちが、仮設住宅に移って来ました。その人たちへの相談支援等、訪問の支援も続けております。

震災前から、障がいを持った人たちが安心して地域で生活が出来るよう支援を続けてきました。

今回、社会貢献者として受賞が決まり、たいへんうれしく思います。

本当に感謝申し上げます。

これからも、変わらぬ支援活動を続けていきたいと思います。ありがとうございました。

NPO法人ひまわりの家　般若　よし子

利用者が手作りしているEM石鹸

お弁当作りの食材

ひまわりの家のスローガン

女将　阿部　憲子

南三陸ホテル観洋

（宮城県本吉郡南三陸町）

地震発生後宿泊客他350名を高台に誘導。2階まで浸水した中で、従業員の家族を含む地元の避難者、ボランティアの合計600名を6ヶ月にわたって受け入れ、現在も地元の方に大浴場を解放、ホテル内で学習支援なども行っています。

●推薦者　公益財団法人　社会貢献支援財団●

震災時、太平洋が一望出来るロビーで、水位がみるみる上昇し土煙を上げながら、町の中心部を津波が飲み込んでいくのを目の当たりにしました。

ただちにお客様の避難誘導をすすめ、直後から住民の方々が当館を目指して次々と着のみ着のままで避難してまいりました。直ぐに電気も水も止まり町は壊滅的な被害となり、当館も橋が流され瓦礫で道が寸断され完全に孤立してしまいました。

若い女性達は泣きくずれ、人々が不安と恐怖におののく中、人々の命を守らないと、人々を力づけないと思い奮い立ちました。スタッフには「心を強く持って。ライフラインが止まり、この施設は孤立してしまいましたから覚悟してほしい。お客様、住民の方々が優先です。おにぎりが1個しかなければ、半分ずつにして配りますからあわてないでほしい。譲り合いの精神で頑張りましょう。」と話しました。

更に食べ物について当日は、お客様と住民の方々我々を合わせて350名程でしたが、これから先、近隣の方々ももっと避難してくることも予想されましたので、最悪の状態が最低1週間は続くと考えて、調理責任者に今ある食材で1週間分の献立をたてる様指示しました。

従業員も大津波に遭い自分の家族の安否も分からない中、お客様や住民の方々を守るために献身的に働いてくれました。又一方で情報が入ってこないのも深刻でした。携帯電話、固定電話もすぐに繋がらなくなりましたし、唯一の情報源であるラジオについても電池が切れない様、時間を限定して聞くしかありませんでした。

更にお客様の中には、持病をお持ちの方も多くあり常用している薬がなかったり等、苦悩の日々に従業員一同結集して対応し、3月17日にはお客様全員を無事にお送りすることが出来ました。

駅も病院もスーパーも流されたその様な状況下、人口流出が深刻に進みなんとか人口流出に歯止めをかけたい一心で、避難所として住民600名の方を受け入れました。その時には学生のいる家庭、経営者の方を中心に受け入れを申し出ました。

何故なら学生は将来の復興の担い手ですし、経営者が倒壊した会社、工場を再開しないと人々がまた職を求めて町から流出しますし、商店主が一日も早く店舗を再開しないと生活の利便性が戻らないと考えました。住民の方々を受入れ、母親達からはすぐに子供の教育が心配と言われ、館内に寺子屋、そろばん教室、英会話のレッスンをボランティアと連携し現在も継続しております。

避難所の役目を終えた翌日より仮設住宅へ無料巡回バスを運行し、ご高齢者には無料入浴日をお知らせしたり、館内でコンサートや映画等イベントを継続し、住民の方々の交流が広げる様実施しております。

避難所としての期間は特に水が4ヶ月なかったというのは深刻な問題でした。公共の避難所に比べて、物資や給水が間々ならず不自由を強いられましたが、給水車を頼み行政を介さず、海水を真水に換える機械等も支援していただき急場をしのぐことが出来ました。

その間4月23日には、紙皿と紙コップを使って食事処を再開させ雇用の場の提供等、明るい話題を常につくる様心がけました。震災直後から地元の取引業者の廃業がつづき、今後地元資本がどれだけ残れるか心配です。

人口流出の進んだ被災地では、交流人口を増やしていくことで地元の一次、二次、三次産業の方々に再び立ち上がるための勇気や希望を与えることが出来ます。地元の人々に活力を与えるためにも、来て見て感じてこの震災から学ぶことがたくさんあると思います。防災意識、減災意識を高める為にも、この震災の体験を決して風化させることなく、後世に語り継ぎ今後に生かされていくことを切に望みます。

南三陸ホテル観洋
女将　阿部　憲子

ホテル全景

3月19日

みんなで体操

ミーティング

左：公立志津川病院　右：防災対策庁舎

壊滅的な被害

7月11日

ホテルから見下す海

会長　小笠原　耕悦

九戸村山友会

（岩手県九戸郡九戸村）

岩手県九戸郡にある避難所や仮設住宅に、延べ185名のボランティアを動員し、15回にわたり炊き出しや支援物資の差し入れをされました。

●推薦者　九戸村教育委員会●

この度は、平成24年度の「東日本大震災における貢献者表彰」として受賞に浴し、これまでご支援、ご協力を頂いた皆様に心から感謝いたします。

ここで、当団体の活動の概要を紹介させていただきます。

3.11.の東日本大震災直後、当村は、停電・ガソリン不足・食糧不足で不自由な生活でした。しかし3月下旬には平常に戻り、4月上旬に被災地の人達に、本会の得意な「山料理」を届けよう…・ということになりました。

57名の会員の中から25名を選抜し、ボランテイアチームを結成。村の社会福祉協議会に登録したところ、早速、釜石市から炊き出しの要請がありました。

4月10日豚汁230食・本シメジの炊き込みご飯のおにぎり260個・郷土料理のカマス餅80個等を提供しました。翌11日（震災1ヶ月目）には、野田村の避難所に行き、豚汁100食・カマス餅90個を提供しました。

その際、慰問に来た鳩山前総理に「これからもボランティア頑張ってください。」と激励され、継続しなければ……との思いを強くしました。

4月22日には、野田村の避難所に商工会婦人部と共同で、せんべい汁を60食。5月6日には、村で招待した高田高校の野球部に、豚汁・炊き込みご飯・ラム肉の行者ニンニク妙め・行者ニンニクの玉子とじ・等の山菜料理。5月12日には、野田村の避難所2か所でウルイ（山菜）のひっつみの炊き出し。

5月6日　高田高校野球部を招待しての炊き出し

6月26日　「えぼし荘」にてステージ発表

5月17日には、野田村の避難所3か所に山菜料理8種類の差し入れ。5月25日、6月18日も同様に差し入れを。そして、6月26日には九戸村ボランティア連絡協議会主催として、野田村の国民宿舎「えぼし荘」にて、ステージ発表（楽器演奏、神楽、踊り、合唱、太鼓演奏）と、大量の支援物資提供と、豚汁・炊き込みご飯の炊き出しを行い、200名被災者のみなさんに喜んでいただきました。

7月には、仮設住宅が完成したので、野田村の5ヶ所の仮設住宅を巡り、7月7日日にはサクランボとお茶。8月11日には、お盆用の花（リンドウ2000本、小菊2500本）、トマト11箱。10月10日には、キノコひっつみ250食、香茸ご飯のおにぎり250個等の炊き出し。11月18日には、米・野菜・リンゴ・毛布・炊き出しに行くたびに、お菓子・タオル・水・酒・化粧品・ジュース・野菜・衣類・下着・果物等の支援物資を届けしました。

その際、盛岡のボランティア団体や当村の野菜農家・花卉栽培農家・菓子店・玉子園・果樹園、その他多くの有志から多大なる御協力を頂きました。

今年度も、炊き出しや支援物資の提供を継続し、村民登山（八幡平）への招待や当村の温泉に招待し、昼食を食べながらの交流会などを企画し、「つながろう村と村」をスローガンに、野田村との絆を深めていきたいと思っています。

九戸村山友会
会長　小笠原　耕悦

4月10日　釜石での炊き出し

4月11日　野田村での炊き出し
鳩山元総理を囲んで

8月11日　野田村仮設住宅へ野菜と盆花を届ける

10月10日　野田村仮設住宅にて炊き出し

代表　高萩　善夫

復興の湯プロジェクト

（岩手県陸前高田市）

陸前高田市で、震災のあった日に避難所に仮設トイレを徹夜で設置。また川で水を汲みドラム缶で沸かして、即席の共同浴場を作り、延べ45000人の避難者やボランティアが利用しました。お風呂場は住民同士の安否確認や、隠れて涙を流す場所でもありました。

●推薦者　公益財団法人　社会貢献支援財団●

あの忌まわしい東日本大震災による大津波が襲来した平成23年3月11日、陸前高田市高田町の市立第一中学校には、1000人もの多くの住民が避難しました。

しかし、水道は出ないし停電という状況。学校の水洗トイレは、使用できなかった上に便器には汚物がたまり、あふれんばかりの光景でした。有事の際など、食事は我慢できても、トイレだけは我慢できません。あたりが薄暗く、吐く息が白いほど寒いにもかかわらず、若い女性でさえ恥じらうことなく、校庭の隅で用を足していました。

その姿を見て、私は自社（㈲共和建設）から木材を運び込み、夕方から応急仮設トイレの設置作業を始めました。10基のトイレが完成したのは、翌日の夜中2時ごろだったと思います。夜が明けてから再びトイレを見に行ってみると、利用しようとする人が順番待ちをしていて、「設置して本当に良かった」と感じました。今回の経験から、公共施設の学校などには駐輪場を設け、その屋根の下に側溝をつくっておけば災害時に側溝のふたをはずし、「応急トイレに活用できるのではないか」と思いました。

震災が発生して8日後の3月19日、会社の社員らと話をしているとき、急きょ「お風呂をつくろう」ということになり、同日午後2時ごろから自社の加工場内に「いきいきぶろ」の設置作業を始めました。24時間ほどで完成し、翌日午後には無料の共同風呂をオープンさせました。すると、そのうわさを聞きつけた被災者らが次々と訪れるようになりました。

それ以来、私は毎朝4時ごろ車に3本のドラム缶を積み、10分ほどかかる場所へ水を汲みに行くのが日課となりました。1.8m×3.6mの男女2つの浴槽に水をためるためには、1日に7往復ほどしなければなりません

大勢の被災者やボランティアが利用した

浴場内

浴槽作り

でした。お湯は薪を燃やして沸かしていましたが、薪がなくなってからは自社の住宅建設用木材を切り刻んで燃やすなどしました。

その後、4月11日には地元住民の協力を得ながら近くの大石公民館へお風呂を移設。「復興の湯」と名付け、男女別に縦1.2m、横2.5mの浴槽を設置しました。お風呂は、避難所となっている体育館や公民館などでの生活で、入浴できない被災者や全国各地から善意で訪れたボランティアらに無料開放。わき水をボイラーで沸かし、入浴者には支援物資のせっけんやタオルを提供しました。

とくに家族を失った被災者は、悲しみの涙を、またボランティアは、体中の汗をさっぱりと洗い流していました。お湯を沸かすボイラー代は、市に灯油代として負担してもらい、毎日正午から午後10時まで開放。一日平均約200人、多い日は300人を超す利用がありました。

施設入口に設置した「サロン」は、薪ストーブを囲んで被災者同士、あるいはボランティアを交えて和やかに談笑するなど、お互いの絆を深め合う、社交場ともなっていました。しかし、市内に仮設住宅整備が進むにつれ、避難所は次々と閉所。被災者が、お風呂のある仮設住宅へ引っ越したことから、灯油代の経費補助が打ち切られ、「復興の湯」は多くの人に惜しまれながら9月10日に閉鎖しました。避難所での仮設トイレや復興の湯の設置を通し、「少しは人の役に立てたのかな」と感じております。

社会貢献支援財団様からの表彰を機に、これからも陸前高田市の復興に微力ながら尽くしていきたいと思っております。この度は、ありがとうございました。

復興の湯プロジェクト
代表　高萩　善夫

1日に何度も往復して水を汲んだ

会長　河野　和義

株式会社八木澤商店

（岩手県陸前高田市市）

陸前高田市で200年の歴史を持つ味噌・醤油の生産販売を営む同社は、津波で総てを流失。

センターを立ち上げ、日頃からの配達経験を活かし全国から寄せられた支援物資を社員が一丸となって避難所や個人宅に届けられました。

●推薦者　公益財団法人　日本太鼓財団　会長　松本　英昭●

東日本大震災で会社が全壊・流失し、社員も半数以上が同じように家を失い、大切な人をたくさん失いました。

「一人も解雇せず、このまま再建に向けて歩きだす」といった九代目の言葉を、当時はマスコミがこぞって取り上げ、被災地の希望の光のように映し出されていました。

社員は正直、不安だったことでしょう。何もなくなったうえに、いままでやっていた仕事がない。でも雇用は守ると決めた。私たちは何をしよう。

震災から約1ヶ月、全国から届くたくさんの物資を避難場所に、買い物が困難な人たちに届けることを仕事とし、ひたすら各地をまわりました。

互いに本音を語る心の余裕も時間もなかったけれど、あの時の私たちは混沌とした中、天を仰いで助けを待つことより、とにかく動き出すことを選びました。

大切な人の安否がわからない中で、黙々と続けた支援物資を届ける仕事。

物資を届けているとき「あなたたちも大変なのに、どうしてそこまでするの？」と問いかけられたこともありました。

状況や心が苦しいのは、みんな同じだから。生業とした仕事でなくてもこれからも地域のみなさまとつながっていく。全国から届けられたたくさんの支援を地域のみなさまにお届けする、そのことも支援と一緒に託されたのだと思っています。

みなさまからのあたたかいご支援のおかげで、会社も地域も復旧から復興の途上にあります。

必ず再建。ありがとうございました。

株式会社八木澤商店
取締役会長　河野　和義

自動車学校の協力で支援物資センターを作った

全国から届いた支援物資を従業員は避難所へ届けて回った

流され、ちろみ消滅

社員一丸 営業再開

老舗しょうゆ 灯消さぬ

岩手・陸前高田

朝日新聞　平成23年4月2日

株式会社八木澤商店

株式会社八木澤商店　大東営業所

代表取締役社長　河野　通洋（9代目）
代表取締役会長　河野　和義（8代目）

〒029-0503
岩手県一関市大東町摺沢字沼田17－12

TEL　0191-48-3532
FAX　0191-48-3526

HP　http://www.yagisawa-s.co.jp
Email　info@yagisawa-s.co.jp

この店構えは東日本大震災により、全壊・流失しました。
皆さまにおわびかけです。

創業２０４年　2011年（平成23年）現在

文化4年（1807年）　八木澤酒造創業。大正年間しょうゆ醸造業を兼業。
昭和19年　当地方8名の酒造業が合併。気仙酒造接業工場となる。
昭和20年　気仙酒造接業工場を評造。ヤマセン味噌・醤油製造開始。
昭和35年　株式会社八木澤商店となる。
昭和57年　しょうゆを加工した。つゆ・たれ類製造開始。
平成15年　第30回全国醤油品評会にて、農林水産大臣賞受賞。
平成19年　創業200周年を迎える。
平成19年　第35回全国醤油品評会にて、農林水産大臣賞受賞。
平成21年　第37回全国醤油品評会にて、農林水産大臣賞受賞。
平成23年3月11日
東日本大震災により、陸前高田市は壊滅的被害を受け、
八木澤商店も蔵、製造工場が全壊、流失。
現在は、岩手県の内陸に営業拠点を移し、岩手県、
秋田県、宮城県、新潟県の醸造蔵に製造を委託、
その商品を販売している。

代表世話人　小林　純子

災害子ども支援ネットワークみやぎ

（宮城県仙台市青葉区）

震災後、宮城県内で子育て支援をしている団体や個人によって組織されました。被災した子供への心のケアと物資や学習支援等幅広いニーズに対応した活動を続けられています。

●推薦者　宮城県　保健福祉部　子育て支援課／宮城県知事　村井　嘉浩●

これまでに、新潟沖地震・宮城沖地震など大きな地震を体験している私でしたが、今回の地震の揺れにはただならぬものを感じました。ライフラインがとだえる中、闇の中のラジオから聞こえてくるのは想像を絶する状況でした。

震災から2週間後に、初めて津波被害のあった地域の避難所に入りましたが、そこで目にしたのは、恐怖から母親と離れられなくなった小学生、異様にテンションの高い子どもたち、暴力的な態度をとる子どもたちの姿でした。まずはこの子どもたちに遊びの環境をつくって、少しでも穏やかな時間を過ごさせてあげたいと、活動を始めました。

私の日ごろの活動は、いじめや虐待などで悩む子どもからの電話を受ける「チャイルドライン」だったこともあり、全国の仲間から、支援の申し出が相次ぎ、物資も次々と届くようになりました。この支援を迅速に、有効に届けたいと考え、80人余りの賛同を得て、4月6日に「災害子ども支援ネットワークみやぎ」が設立しました。

物資支援では宮城県の災害対策本部とも連携し、県内の保育所、幼稚園、学校、避難所、仮設住宅などに届け、その数はトラックで70台分程になりました。

子どもたちへの支援として、県内小中学校全校へ「チャイルドライン」のカードを配布し、子どもの心の声を聴く体制を強化するほか、被災で中止になった学校公演を復活させるプロジェクトの実施や、イベント実施、人形劇公演、学習支援等、連日活動を続けてきました。

仮設住宅の整備に伴い、生活は落ち着いたかに見えますが、子どもたちの状況は依然として厳しく、宮城県だけでも126人が両親を無くし、741人が片親を無くしています。また、津波などで校舎がなくなり、仮設校舎を使用している学校が20校、他校に間借りしている学校が、32校となっています。県内には220,425戸400団地の仮設住宅が建ちましたが、その中に暮らす子どもの数は依然として正確には把握されていません。狭い仮設住宅の中では、十分な遊び場や勉強の場が確保されていないという声も聞こえています。

今回の受賞は、このような子どもたちのために、更に力を尽すようにという励ましと受け止め、今後も長く活動していきたいと思います。またこのような活動の成果は、一緒に活動して下さった多くの団体や個人の協力なくしてはあり得ないものでした。心から感謝を申し上げ、共に喜びあいたいと思います。社会貢献支援財団、ご推薦いただいた関係者の皆様、ありがとうございました。

代表世話人　小林　純子

津波被害で使用できなくなった多賀城市の幼稚園舎
時計が津波到達時刻で止まっている

左の写真の幼稚園が市より代替施設を借りて再開
全国の皆さんからの寄付金を持ってお祝に駆けつけた

学校公演復興プロジェクト
獅子舞に喜ぶ子どもたち

被災者支援託児ルーム開設
家の片付、引越、職探し等の際の子どもの預り先の必要性を考えてのこと

支援物資で遊ぶ仙台市保育園の子どもたち

ほっぴい公演
東京の保育士さんたちの人形劇団公演を楽しんだ

七ヶ浜子育て支援センターで託児のお手伝い

広島からグランドピアノの寄贈申し出があり、亘理町の児童館へつないだ
コンサートも開かれ、子ども、地域の方に喜ばれた

会長　大越　雅行

公益社団法人　隊友会　宮城県隊友会

（宮城県仙台市宮城野区）

宮城県に住む自衛隊退職者で組織する会で、震災後直ちに防災ボランティアチームが活動を開始。延べ600名近い会員が、食事や物資の配分を行いました。また全国から集まった会員を指揮し、県内各地区の民家の泥土や瓦礫の搬出などの支援を続けられました。

●推薦者　公益社団法人　隊友会●

「東日本大震災における貢献者表彰受賞について」

この度、東日本大震災における貢献者表彰の受賞の旨ご連絡を頂き、会員一同大変嬉しく思うとともに感謝致しております。

この受賞は、公益社団法人隊友会にとって、二つの大きな意義があります。

それは、第一に私達の社会貢献事業が、権威ある「社会貢献支援財団」に認められたことであり、大変名誉なことであります。

第二は、今回のようなボランティア活動は初めて実施しましたが、この受賞を弾みとして、これからはこの様な社会貢献事業も自信を持って推進していくことが出来るようになったことです。

私達は救難活動をいろいろ実施しました。具体的に述べますと、先ず第一に、震災直後から4月末位までは、被災した自治体、或いは被災者が避難した自治体に所存する県隊友会の6支部が、避難所の管理運営を始め、避難者に対する炊き出しや物品の配分等の支援及び市町村からの依頼を受けて、防犯パトロール等を実施しました（460人日）。

第二に、4月上旬の約1週間は、仙台市から依頼されて、市内の約80校の小・中学校の入学式等の為に避難者が体育館等に残置した多くの毛布の撤去をしました（220人日）。

第三に、五月のゴールデンウィーク終了後から6月末までの約二ヶ月間、全国隊友会の支援のもと県隊友会と一緒に、毎日14～15人の規模で、被災地である石巻市・気仙沼市・岩沼市において浸水家具の搬出・床下の泥土の除去・側溝の泥上げ・破損したビニールハウスの支柱等の撤去等を実施しました（約640人日）。

第四に、災害派遣中の自衛官の親族の方で五月に入っても発見されていない行方不明者がおり、OBである隊友会にこの方達の捜索をお願いしたいと自衛隊から要請されました。

これは、我々隊友会にしか出来ない事であると認識し、五月中旬から六月上旬迄の間、要請があった隊員の立会のもと（隊員が遠方の場合はその親族が立会）、被災されたと思われる地域で、毎回約13人位で捜索を実施しました（約140人日）。

これらの活動の結果、多くの被災者から直接お礼の言葉を頂き、また礼状を頂く等、大変感謝されました。特に、被災し気力を落とされた方から、「お蔭様で生きる勇気が湧いてきました」と言われたこともありました。

更に、自衛隊からも礼状・感謝状を頂きましたことを申し添えます。

公益社団法人隊友会　宮城県隊友会
会長　大越　雅行

理事長　髙橋　永真

ＮＰＯ法人　相馬はらがま朝市クラブ

（福島県相馬市）

相馬市で朝市を開催し物資を供給。また平日は毎日仮設住宅1500戸に「リヤカー隊」が訪問、障がい者や高齢者への物資の供給他、地元での雇用も生み出しています。

●推薦者　相馬市長　立谷　秀清●

私たち「NPO相馬はらがま朝市クラブ」は、東日本大震災で被災した相馬の水産関係者が集まり、被災者だけれども被災者の方々を支援する団体として、この1年間活動して来ました。

このNPOは震災直後の本当に物資もなく、やることは瓦礫撤去だけ、TVを付ければ震災のニュースと同じCM。酒を飲む気力も無く、おにぎりとカップ麺にも飽き飽きしており、何かをしなければと思い、同じ境遇の仲卸組合の仲間に話しかけ、朝市をやろうと決意しました。が、その当時は施設、場所も無く、もちろん前浜での水揚げも無いので途方にくれておりましたが、強引に商工会議所、市役所にお願いに行き、上手く相馬市長にも伝わり「相馬の復興は魚だ！」と云われ、全面協力を頂きました。

会場は相馬野馬追いがスタートする馬稜公園に、10テントを張り、椅子、テーブルの他に1,000人分の料理が出来る防災鍋をお借りし、5月3日から5日まで開催し、約6,000人の被災者の皆様が集まりました。

会場には、まだ避難所生活だった人たちが、震災後離れ離れになって久しぶりに会う知人、親戚の方々と抱き合い、喜び、涙を流す人たちが大勢いました。

本当にこの当時は、朝市を開催して良かったと思います。また私たち朝市クラブも、もしかして失った仕事が出来ると思い、希望に胸を膨らませましたが、やはり被災地は甘くありません。当時はまだ避難所生活なので生魚を販売しても避難所では調理が出来ず、いくら美味しい魚でも段々と買う人が少なくなり、早朝に仙台の市場から仕入れた魚は売れ残る様になりました。

加工場もほぼ被災しており、冷蔵庫の設備もなく在庫も出来ず、廃棄するしかないので、来場者の皆様に無料で配りました。それが支援物資の始まりです。それでも集まってくれる人たちがいる限りはと思い。赤字ながら続けていると、個人的な支援者がダンボール箱1ケースの支援物資とギターを持って励ましの歌を歌ったりと、全国の支援者が集う様になって来ました。その後は大きな団体も続々と相馬のために色々なご支援を頂き、本当に日本人は凄いと感じ、毎回朝市が終わると感動で涙が出ました。また、震災が無ければ出会えなかった人たちとも知り合え、「絆」という言葉が身に染みました。

現在は、瓦礫も少なくなり見た目は普通になりましたが、やはり一次産業の復活が無い相馬は未来が見えないので、仮設の人たちも、在宅の人たちも不安な生活となっております。そんな相馬でも未来に向かっていく姿勢を微力ながら、私たち朝市が出して行けば、少しは明るい相馬になるかと思い、現在も活動しております。

この先も長くなる事は明らかですが、このたびの授賞により、私たちの活動を見守ってくれる人も居る事が分りましたので、今後も相馬の産業と雇用復活のため頑張って行こうと思っています。

NPO法人 相馬はらがま朝市クラブ
理事長　髙橋　永真

配布が始まります

「ひとつづつね！」

開始を待つ人たち

パフォーマンスを楽しみにする人あり

交流の場となっている

理事長は率先してたこ焼きづくり

生徒会長　及川　渓太

釜石市立大平中学校

（岩手県釜石市）

校舎は津波で壊滅的な被害を受けましたが、生徒達はボランティア活動に参加するとともに、同校の伝統的な踊りとなっている「大平ソーラン」を仮設住宅等各方面で披露し、被災者に元気を与えられました。

●推薦者　釜石市立大平中学校●

「復興、支え合い・助け合い、感謝の気持ち」

3月11日の東日本大震災により、私たちの町、釜石は大きな被害を受けました。これからどうなるのだろうと、不安な気持ちになりました。

学校が始まるまでの期間、自衛隊や警察、全国のボランティア団体からの沢山の支援を頂きました。また、学校が始まってからも、全国や海外の中学生から励ましの手紙や横断幕、寄せ書き、千羽鶴をいただきました。

色々な方々に支えられて、普段に近い状態で学校生活を送る事が出来るようになり、僕たちは、感謝の気持ちを伝えたい、釜石復興のために、何か行動をしたいという気持ちになりました。そこで、総合的な学習の時間に、自分たちの住んでいる地域でボランティア活動をすることにしました。

テーマは「復興、支え合い・助け合い、感謝の気持ち」です。

1回目は、5月に学区内の避難所を回り支援物資の整理や配布、清掃活動、各家庭を訪問し、復旧のお手伝いをしました。被災された方々から「ありがとう」と声をかけられ、心が温かくなり、ますますやる気がわいてきたと感想を持った生徒が多くいました。また、地域の方から「太平ソーラン」が観たいという声があり、次の活動に向け全校生徒で練習に取り組みました。

2回目以降は、仮設住宅を回り、市のボランティアセンターとの連携を図りながら活動を行いました。

仮設住宅での高齢者とのふれあいも、新たに企画し取り組みました。太平ソーランの披露では、満面の笑顔や涙を流して観て下さった方など沢山いらして、大きな拍手をいただきました。僕たちは、少しでも元気・勇気・希望を届けられたと、活動を振り返ることが出来ました。

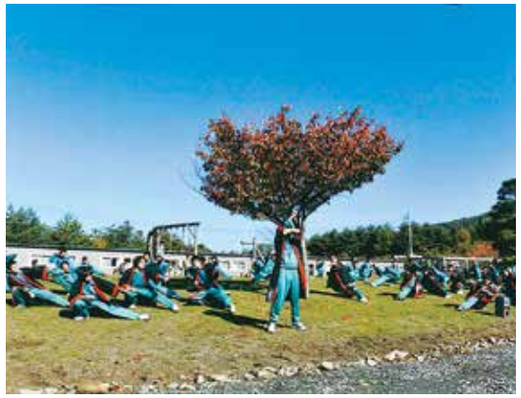
今年度行った4回のボランティア活動を通して、僕たちでもできることがあるということを知り、お互いに支え合う大切さを学ぶことが出来ました。

今回、僕たちの活動が認められ、公益財団法人　社会貢献支援財団より、貢献者表彰をいただいたことに、感謝の気持ちでいっぱいです。

これからも釜石の復興のため、僕たちの出来ることを、精一杯やっていこうという意欲がわいてきました。

「負げねぞ　釜石！」

釜石市立大平中学校
生徒会長　及川　渓太



青空の下でのパフォーマンス

仮設住宅を訪問

「太平ソーラン」を披露

支援物資を配布

代表理事　馬場　照子

亘理いちごっこ

（宮城県亘理郡亘理町）

震災後、宮城県亘理町の集会所で、被災者に無料で食事が出来るカフェを運営。相談にのるなど、被災者に寄り添った心のケア活動をされています。

●推薦者　乳井　昭道／山形　俊子●

町の集会所での活動の様子（5、6月）One Plate Bikingで野菜をふんだんに使ったバランスのとれた食事を提供

「被災地は今」

東日本大震災後、避難所では満足な食事をとることが出来ない状況でした。

1日2食。ことに会社勤めをしている方たちにおいては、朝10時の食事を食べることはできません。また、16時に支給される夕食は、帰ってきたころには固く冷たくなってしまっていました。冷え切ったご飯を冷え切った汁物に浸して食べていたのです。

被災地にて早急に解決していかなければならない4つの課題を見出しました。

①罹災者やボランティアへの食事提供

②浜で津波の被害を受けた方と、丘側でライフラインが復旧すれば普通に生活できる人々。それぞれが理解し合えるような環境の整備

③被災地外からの支援のジョイント

④支援を受けたままにせず循環・継続可能な支援へ繋げる試み

2011年5月3日、前述した課題を解決するため、たくさんの支援者たちの協力を得ながら、被災地における被災者たちによるコミュニティ・カフェレストラン“亘理いちごっこ”が立ち上がりました。

罹災証明書をお持ちの方には完全無償で、それ以外の方たちからは500円＋志をいただいて食事の提供を行いました。

40畳のフロアにたくさんの方たちが集まってくださいました。食だけではなく余暇活動を行うことで元気になっていただこうと様々な企画を実施しました。また“いちごっこ”で、震災後初めての再会を果たされた方たちもたくさんいらっしゃいました。生きているとも亡くなっているともわからなかった者同士の感動の再会でした。

亘理いちごっこ
代表理事　馬場　照子

移設後初めてのライブコンサート
地域内外のたくさんの人で賑わった

多い日には150人以上の方が集まりました

仮設住宅へ出発！！　プレハブいちごっこ前にて

事務局長　佐藤　由紀子

NPO法人 まごころサービス福島センター（子育て支援部門）
こども緊急サポートネットワークふくしま
（福島県福島市）

原発から避難してきた乳幼児を抱える避難者のために物資を調達。仮設住宅に暮らす世帯の子育て支援や、現在は学習支援を視野にいれた活動を主に行われています。

●推薦者　蓬莱まちづくりコミュニティぜぇね●

授賞式にお招き頂き、ありがとうございます。

シンディー・ローパーも語っていました。「私たちができることは、東北からものを買うこと。福島のお酒を買って下さい。目の前で、人が転んだらどうしますか？私は、手を差し伸べるような人間になれと育てられた」と。

福島人は、雨にも負けず、風にも負けず、雪にも放射能にも負けずに暮らしています。どうか忘れ去ろうとしないで下さい。福島は、生きています。

あの日から3週間、市内はガス・水道が斬絶。店は、閉鎖か買占めで品不足。朝2時からガソリンを求める長蛇の列。

想像してください。風呂やトイレ、温かい食事といった日常が制限される生活を。配給車に並び、食糧を確保し、昼夜を問わずに、頻発する余震に警戒する日々を。その状況でも、仕事は仕事といわれる現実を。

その間にも、放射能から着の身着のままで、逃げて来きた避難者が2万人。「子育て支援をしている団体ですか？ミルクは、ありませんか？」ようやく繋がった電話でそう言われたら、全国の関連団体から支援物資を集めて配るしかありません。目の前の店に、商品がないのですから。

物的支援が落ち着き始めた夏頃からは、虐待・いじめといった心の問題が表面化してきました。避難所という閉鎖空間での集団生活が、数ヶ月も続くストレス。避難所を転々とする子どもたちの学力低下、非行化も見えてきました。

炊き出し準備中

芸術療法

学習支援も行っている

この時期、当方でも炊き出しを行いましたが、小さな避難所には、物資が届かない、支援者も来ないという格差も生じてきました。

秋、仮設住宅に避難者が移る頃、当方も子育て支援特化型の居場所事業を始めました。仮設住宅での生活は、孤立化、孤独死を生むと阪神淡路大震災の事例が、復興会議等で語られるようになったのも、この時期です。

当方では、放射能問題で外遊びが制限されている子どもたちのストレス発散として、芸術療法を始めました。壁一面に向かい、好きなだけ画材を使い、時には手足も使い自由に表現する。課題も指摘も指導もありません。

一方では、学校支援も始めました。特に受験生は、避難所を転々とする暮らしの中で、勉強が遅れているというハンデがあります。この原稿を書いている頃。ちょうど受験の本番です。

さて、今後についてですが、福島人は、何を望むか。それは、生活再建、具体的には、住と職です。放射能で、（自宅に）帰れないという地域もあります。風評被害で、物が売れないと嘆く地域もあります。その中間で、避難か留まるかの選択を迫られている地域もあります。

福島県は、日本で3番目に広いのです。地域で望みも異なります。

皆様にお願いしたい事。温泉やスキーにでも来て下さい。福島のお酒が待っています。

こども緊急サポートネットワークふくしま
事務局長　佐藤　由紀子

スタッフ会員養成研修会の様子

会長　松山　昭雄

室根町自治会連合会

（岩手県一関市）

一関市の室根町の自治会のボランティアにより約一か月間、炊き出しを行い、毎日約1000個のおにぎりを1ヶ月近くにわたりを気仙沼市の避難所に届けたり、入浴などの支援をされました。

●推薦者　岩手県一関市　市民環境部協働推進課●

忘れもしない3月11日。震度6弱の地震が当地域周辺をおそった。直後から、停電、断水。各家庭の家具やタンスは倒され、地区センターの自動ドアなどが折れ曲がるなど大きな被害があった東日本大震災でした。

職場や自宅も大きな被害に遭い、後始末に追われました。停電による情報網の寸断により、周りの様子が何ひとつわからないまま時間が過ぎて行きました。夕方になり辺りが薄暗くなった直後、宮城県気仙沼市方面の上空が、火事が起きたのか赤く染まりました。近くの方がカーテレビでニュースを見て、「気仙沼市が大津波で、死者行方不明者が多数」であることを伝えに来ました。

このことが自治会長を通じ連合会に情報として入り、直ちに次の日の朝、一関市役所室根支所に自治会長が集まり支援協議。その日から20の自治会で炊き出しを開始。各自治会を回り、約1000個のおにぎりを午前と午後に分けて、宮城県気仙沼市の避難施設に運搬。途中、大津波で破壊された建物等の変わり果てた気仙沼市の町並みを運転しながら、避難施設まで運搬しました。

避難施設では皆さん寒さに震え、暖房もない体育館内で固まって耐え忍んでいた姿を今でも忘れません。あったかいうちに食べてもらえるよう、発砲スチロール製の箱に入れて午前中に一度、午後に一度運搬しました。二度目の運搬で避難施設に行くと、先に運搬したおにぎりが全てなくなっているのを見て、数が足りないことを思い知らされました。

室根町自治会連合会に加盟する皆さんが、一生懸命おにぎりをにぎる姿。田舎で大切に守られている「困ったときはお互い様」の精神。誰ひとり嫌と言わず連日のおにぎり作りは、初めは各自治会館で、途中からは室根保健センターで行われ、気仙沼市避難施設へ送り届けました。ほかにも各自治会から水や牛乳、汁物、下着・着物類や毛布類など多くの物資も届けることができました。

また、気仙沼市本吉町で被害に遭い、近くの本吉町小泉中学校や室根町にある旧津谷川小学校へ避難していた方々には、入浴施設が不足していたため、室根交流促進センターにある浴室を解放し、各避難所ごとに入浴時間を割り当て、ゆったりと入浴してもらい喜ばれました。

今回の東日本大震災は、今までに考えられないほどの大きな被害があり、とりわけ津波の恐ろしさと災害時の対応をよくよく考えさせられました。まだ復興には長い年月がかかると思われますが、この受賞を機に室根町に避難してきている方々ばかりでなく、被災者の皆さんへ何かしらの支援を継続して行なっていく決意です。最後に被災した地域の早期復旧復興をお祈りいたします。

室根町自治会連合会
会長　松山　昭雄

1日約1,000個ものおにぎりをにぎった

会長　菅原　五三男

大原自治公民館等連合会

（岩手県一関市）

一関市の大原地域の自治会ボランティアにより、陸前高田市の避難所などへ1週間炊き出しや、入浴支援や物資の支援を20日程されました。

●推薦者　岩手県一関市　市民環境部協働推進課●

大地震の後、3月14日に電気が復旧し、初めて津波や火災の映像を目にし、沿岸部の被害の大きさに言葉を失ってしまいました。特に、陸前高田市は大原地区と隣接しており、古くから交流も深く、地区民にも何かしなければならないという気持ちが強くありました。このため、地区内の全自治会で話し合い、一関市に被災者支援を申し出ました。

その日から大原公民館を利用し、陸前高田市下矢作地区に二百人分の昼夜食の炊き出しを行い、六日間続けました。3月21日から一関市が入浴サービスを開始。これに合わせ地区内の食生活改善グループのメンバーに献立表の作成と調理指導をお願いし、食事のおもてなしを行いました。ガソリン不足のため、公民館から遠い地区は自治会役員が調理役の方を送迎しました。

中には二週間ぶりの入浴という中学生の女の子もいました。憔悴してこわばった表情が、入浴後にはホッとした穏やかな表情に変わったことがとても印象的でした。この間、地区民は勿論、他地区の方や市職員、警察の方々が持ち寄った衣類や日用品を浴室前のホールに陳列。必要な物があれば自由に持ち帰ってもらうようにしました。また、地元理容師によるカットサービスも行いました。

入浴サービスは4月6日で終了しましたが、被災地の皆さんからは折りにふれ近況のお知らせが届いています。感謝の言葉とともに復旧・復興に向けて力強く第一歩を歩みだしたとのこと。未曾有の大災害の中で前を向いて進む姿に頭が下がる想いです。

仮設住宅への入居は完了しましたが、グラウンドや体育館を奪われた子供たちは、こちらの体育施設を利用していました。今年もグラウンドの利用申込みが来ています。

子供たちを取り巻く環境も震災前には戻っていませんし、本来の住まいと生活を取り戻すにはまだまだ時間を要することでしょう。時間が震災の記憶を風化させることがないようにしなければならないと思います。

震災後、地区内と被災地のスポーツ少年団が練習試合を組んで、子供たち、親たちが交流を始めたようです。交流を通じて、今何が求められているのか感じること、微力でも支援を続けていくことが大切なことだと考えています。

支援活動は、「困ったときはお互いさま」、当然のことと行ったことですので、今回の受賞には驚いております。

大原自治公民館等連合会
会長　菅原　五三男

地元理容師によるカットサービス

一関私立大原公民館　活動場所となった

並べられた支援物資

炊き出しの打ち合せ中

炊き出しの様子

入浴サービス後には食事の提供も

会長　小林　悦子

蓬莱まちづくりコミュニティぜぇね

（福島県福島市）

高齢化が進んだ蓬莱団地で無料コミュニティバスの運営をしているところから、震災後すぐに利用者の安否確認を実施。高齢者に代わり水汲みや買い物をする他、仮設住宅とショッピングセンターを結ぶ連絡バスの運行などの支援をされています。

●推薦者　NPO法人　まごころサービス福島センター（子育て支援部門）こども緊急サポートネットワークふくしま●

この度は、東日本大震災における社会貢献者としてご選考頂き、誠にありがとうございます。とても嬉しく、また光栄に思っております。

震災から、一年が経ってしまいました。本当に、無我夢中で過ごした一年でした。私の住む福島市の中通り地域は、沿岸部の浜通りに比べ地震の被害も少なく、もちろん津波による被害もありませんでした。

ただ、思いもかけず、福島第一原子力発電所の爆発による放射能に翻弄されております。目に見えない放射能との戦いの日々ではございますが、同時に目に見えるかたちで、被害に遭われた方たちが、大勢県の内外に避難されております。

自分たちに出来ることは何か？と震災直後から動き始めました。私は通常NPOとして、福島市南部に位置する蓬莱団地という、開発してから40年が経過し、少子高齢化が進む住宅団地とその周辺の蓬莱地区において、無料コミュニティ循環バスを運行しております。

直後は、電話も通じませんので、一人暮らしのお年寄りの安否確認に走り回りました。また、余震が続いておりましたので、その夜は、私共の事務所があるショッピングセンターの駐車場が、ぎっしりと車内で夜を過ごす人で埋まりました。

夜間は、無人になるショッピングセンターですが、蓬莱地区は、電気が点いておりましたので、私共の事務所の明かりを一晩中灯して、トイレも解放いたしました。

翌日から給水車に並んで、お年寄りへは水を届け、長蛇の列に並んでは、限定販売のスーパーへ買物代行をいたしました。

ガソリンが不足し、バスの運行を3日間休みました。でも、怖い思いをしているお年寄りにとって、外出して誰かと「怖かったね」「でも大丈夫よ」という場が必要と思い、いろんな方の協力をいただいて、4日目からバスを走らせることが出来ました。

以下は、浜通りから続々と避難して来られた方へ、行なった支援です。支援物資の呼びかけからお届け、避難所への炊き出しや訪問活動等。放射能を吸収するという向日葵の種を、近隣の農家の方たちと蒔きました。向日葵の種は、全国から実に1t近く集まりました。夏休みには、子ども達を県外で過ごす取り組みを行い、延べ103人、63日間お世話させていただきました。

今は、仮設住宅間の循環バス運行を通じて、仮設住宅コミュニティと外出支援を行い、閉じこもり防止と健康維持のため、健康講座を定期的に行い、避難されている方の自立支援をしております。今年は、県外へ避難されている方々への、ご支援をさせていただきます。

まだまだ、放射能の影響は続きます。全国の皆様に、ご支援いただいたことに感謝しながら頑張って行きますので、被災地のことを忘れないで長く応援して下さいますよう、お願い致します。

蓬莱まちづくりコミュニティぜぇね
会長　小林　悦子

通常の支援活動
（23年3月11日直後～）
・震災直後、一人暮らしの利用者さんの安否確認
・震災当日バスの待合所を夜中も開放し、一人暮らしの高齢者を中心に声かけ、一夜を明かす。
・ガソリン不足でバスが運行出来ないため、買い物困難な高齢者の水汲みと長蛇の列の買い物代行をする。
・福島県内がガソリン不足の中、関係者でガソリンを集め「コミュニティ循環バス」を4日目から運行再開した。

避難者への支援
（23年3月11日直後～5月連休まで）
・南相馬市の避難施設や福島市内の避難所へ生活必要品の支援物資を自家用車で届ける。
・野菜などの物資は、避難所炊き出しとして応援。
・知的障害者が一般の避難所での生活が適合できないとのことで、個人宅を開放し支援する。
・福島市内の幼稚園保育所へ子ども用マスクの支援物資を届ける。
・避難所から仮設住宅へ移る方へ台所用品等一式、食器5セットを14家族届ける。

避難所での活動
（23年4月初旬～）
・避難所に訪問し、袋物の手芸教室・うちわづくりなどの講習会を開き避難者の方たちと交流を行なう。

被災地での活動
（23年5月～）
全国から集めたひまわりの種を、放射能の影響で農作物を自粛せざるを得なかった県内の農家の方たちと、協力して広範囲に蒔いた。秋には菜の花も蒔いた。

子ども達のリフレッシュキャンプ
（23年7月～8月）
全国の方々のご協力を得て、「福島県民夏休み親子疎開」として、福島の子ども達が夏休み中を県外で過ごす取り組みを行なう。5県へ述べ103人、63日間お世話させていただきました。

仮設住宅への支援
（23年9月～）
・飯舘村の仮設住宅がある飯野町と松川町と蓬莱ショッピングセンターを結ぶ仮設住宅間の循環バス運行を通じて、仮設住宅コミュニティと外出支援を行なう。
・閉じこもり防止と冬季間の健康維持のため、県立医大の先生と協力して集会所等で定期的に健康講座を行なう。
・その他、避難者の自立支援。主に原発による計画的避難区域の飯舘村・葛尾村と交流している。

髙橋　實（74歳／宮城県仙台市宮城野区）

宮城野区の町内会長として、震災後４地区の被害状況の把握、安否確認、自衛隊や警察の瓦礫撤去や犠牲者捜査へ不眠不休で協力、対策委員会を立ち上げ、行政への要望に奔走、諸問題への早期決着に尽力されました。

●推薦者　大和田　哲男／仙台市宮城野区●

悪夢のような、昨年3月の東日本大震災から、早や満1年目を迎える時期になりました。

巨大地震による被害は、津波による被害でした。日本の歴史上、千年に1度の巨大津波が多くの犠牲者を生みました。

私たちの中野地区は、市内で、最も被害の大きな地区のひとつとなりました。津波による犠牲者が多かったことは、津波に対する認識の不足と、これまでの警報の内容と実際に来た津波のギャップが、警報を甘く捉えた大きな要因であったかもしれません。犠牲者の多くは、高齢者でした。これが夜の津波であったなら、次世代を担う多くの子どもたちも犠牲になったことと思います。

震災以来、私も微力ながら、無我夢中で災害対策、復旧・復興の難問題にどっぷりはまった1年だったと、今になって思っています。たまたま、町内会会長だったという身のため、命が助かった限りは、使命感を持って、行政側の仙台市役所・県庁はもちろんですが、宮城野区役所に日参してまいりました。

区長を始め、副区長、部長、各課の課長や係長様たちに休日・祝日、おかまいなしに相談に上がり、心温まる御助言や御指導を受け、甚大なパワーと助力を得て、大きな責任を感じながらも、お互い様、お蔭様の心情で、地域のリーダー格の一人として努めて明るく前向きに、頑張って来ました。

それも、今考えますと感謝あるのみです。住民のため,未来の子どもたちの将来の事を思う時、「新しい歴史を作るのだ」そんな理念を持ちながら、「笑う門に福来たる」とプラスイメージで頑張れば、真の福の神が舞い降りると信じ、明るく、明るく歩んで来ました。

この災害で、人間として毎日の平凡（普通）の生活が、いかに幸福だったのかを改めて実感しました。

でも、災害で出会った人たちは、皆素晴らしかった。自衛隊の隊員を始め、警察官・消防、多種ボランティア団体の活動は,涙が出るほど有難かったです。

また、この各方面の責任者たちの温情に数多く出会い、施心・洗心・無心・親心が

自宅付近に押し寄せた津波

充電され、復旧・復興のアイディアや協力など、ふるさとの更なる進歩・発展が望めると確信いたしました。

私自身、社会貢献支援財団の存在すら存じておりませんでしたが、知人たちの推薦に預かり、表彰されると言う事は、身に余る光栄です。ありがとうございました。

中野小学校区復興対策委員会の委員長として、防災に強い安全安心な街づくりを目指して、益々頑張ります事をお誓い申し上げまして、御礼の一言と致します。

地域のために連日不眠不休で問題解決に奔走した

分散避難 復興妨げ

仙台・蒲生

住民 連携に不安

河北新報　平成23年3月26日

駒場　恒雄（66歳／岩手県花巻市）

ご自身が車いす使用の身体障害者でありながら、日本筋ジストロフィー協会の被災した会員のため、安否確認や自宅訪問とともに状況を確認。後日被災した難病患者の実態と課題を随所で報告し、障がい者理解のための活動をされています。

●推薦者　大高　博光●

この度は、このような賞を頂き、身に余る光栄だと思っております。誠にありがとうございます。

来るぞ、来るぞと言われ災害対策をしてきたところであった。自然の猛威を予測することは難しく、その対策をあざ笑うかのような未曽有の大災害だった。

津波から車いす障がい者の子を守ろうとした親子三人が被災、更に火災で全て焼き尽くされ、遺影にする写真も無いと戸惑う親族との出会い。自力で避難できない人たちへの支援のあり方について、心配していたことが現実となった。

発災後、体が不自由で現地支援のボランティアもできず悶々としていた。在宅で孤立した同じ障がいを抱える仲間の安否確認をラジオ、インターネットなど駆使して、現状の把握と、声掛けや相談に努めてきた。この災害の体験と教訓をまとめ、各種報告会場で課題や提言として報告。障がい者にもできる災害支援の活動とした。

30数年前に治療法の無い難病と宣告され、徐々に筋力が低下し、自力歩行も困難になり日常生活の全てを妻一人に委ねて暮らしている。不自由な体に偏見や役立たずと差別に苦しんでいた。わずか1センチの段差に躓き、狭い通路が車いすの通行を妨げる環境を「1センチの闘い」と題して新聞へ投稿した。その反響は大きく、バリアフリーの街づくりやスロープ設置など見直しに役立つことができた。

山田町の訪問先にて

幸子夫人とともに

2005年アメリカでハリケーンによる被災で、避難困難な病人を安楽死させる事件報道にショックと恐怖を記憶している。2006年に国の出した災害弱者に対する災害時要援護者制度の指針は遅々として進まなかった。避難所に一人で行くこともできない車いす障がい者として、生きることを諦めなければならない覚悟も必要と自分に言い聞かせ、新聞への投稿や各種会議で制度の必要性を訴え続けてきた。

「災害時要援護者支援制度」が作られたが、住民や当事者への周知徹底が至らないままに被災。この体験を風化させることの無いよう、当事者にも避難方法や用具の準備など自助努力も必要と、提言など障がい者福祉活動を続けている。

体が不自由になって以来、自分にできる役割を見つけ精一杯生きることに挑戦してきた。この姿が仲間の励みになると信じ、安心して共に暮らせるまちづくり、地域でともに生きていくことを支える活動を続けていきたいと思う。

釜石市の仮設住宅を訪問

ワークショップにて発表する駒場さん

梅田　祐一郎
（46歳／宮城県気仙沼市）

愛甲　香純
（31歳／宮城県気仙沼市）

お二人が勤務する気仙沼シルバーセンターは高台にあり、震災直後40名が避難してきました。ご自身も家が流されたり家族を亡くしながらも、避難者の為に集めてきた食糧等で炊き出しを行うなど避難所としてお世話されました。

●推薦者　宮城県気仙沼市シルバー人材センター　柏木　芳朗●

「あの日を忘れてはいけない」

「俺が受賞？いいの俺で？」社会貢献支援財団から受賞の通知が来た瞬間の正直な気持ちです。同じ被災地で私以上にご苦労され救援活動を行っているみなさんが多くいる中で、何か申し訳ない気持ちです。私は、人として当たり前のことをしただけですから。

今振り返って見ると、あの当時は頭で考えて行動したのではなく、感性で身体が勝手に動いただけだと思います。

巨大津波が容赦なく沿岸部を襲い、燃え上がる大炎に包まれた市内。しまいにはみぞれ雪まで降って来て、「神様はどこまで虐めるのか」と天を見上げ罵りました。

当気仙沼シルバー人材センターは高台に位置しており、約40人の方々が行き場を彷徨い事務所に来られました。幸いにも反射式ストーブが数台あり、タオル、軍手、厚手のトレーナーをみなさんにお渡しして、あの悪夢の一夜をしのぎました。「みなさんを生かさなくちゃいけない。」と心を奮い立たせ、翌日は日出ともに行動し、水や食料の確保に無我夢中で走り回りました。　必然的に当センターも避難場所となり、多くの支援物資が届くようになると、困っている方々への配布作業も同時に行い、避難していた最後の方の住居が決まり、避難場所としての役目を終え、私も家族と一緒に仮設住宅に住むことが出来たのは八月初めでした。

長年住んでいた場所がわからない殺伐とした街、異臭の漂うガレキの街となり、今では、淋しい限り何もない街に変貌してしまった気仙沼市。この夏には雑草だらけの街と変わってしまうのか？

震災から1年が過ぎました。震災直後は、1日1日を生き抜くことで精一杯でした。現在の方が、今後の生活を考えなくてはいけない分、精神的には苦痛かもしれません。いくら考えても答えが出てこないのです。

しかし、少しでも前に進まなくてはいけません。そろそろ世界中、全国のみなさんからの温かいお心に「甘える心」だけでなく、「自立する心」を強く持つことが大事と考えます。

自らの両手両足で、幸せを掴まえなくちゃ。運よく生き残った命です。生かされている命です。一度きりの人生です。決して後悔しないように、市民のみなさんと温かい言葉を互いに掛け合い、泣く人生よりも笑う人生を心がけ、「笑う門には復興来たる」と「いつか必ず恩返し」の気持ちを忘れずに、故郷気仙沼でこれからも暮らして行きます。

梅田　祐一郎

この度、このような栄を賜りましたこと、心より御礼申し上げます。また、ご推薦くださいました公益社団法人気仙沼市シルバー人材センターの柏木芳朗理事長には、日ごろからの感謝とともに御礼を申し上げます。

当センターの基本理念は「自主・自立・共働・共助」であり、当センターに避難された被災者の皆さまも、混迷する中、その理念の元で気丈に避難所を自主運営されておりました。食材も少ない中、にぎりたての暖かいおにぎりをいただいたり、元気の良過ぎる子供達を自衛隊のお風呂に連れて行ってもらったりと、皆さんからは支えられるばかりでした。また、当センターの三浦常務理事をはじめ、センターに携わる皆様の人脈により、沢山の救援物資が全国各地から寄せられました。いただいた救援物資の配布も、梅田事務局長の抜群の行動力があってこそであり、私たちは各々の所属等を活かし、協力して行った活動です。私は、ただただ多くの方に支えられながら、震災後の毎日をなんとか必死に生きていただけであり、この度の受賞に恐縮するばかりです。

昨年の8月1日、当センターに避難されていた方々はそれぞれの生活へと戻りました。しかし、あくまでも仮の住まいである方が多く、繰り返される日常が落ち着きを取り戻したかの様にも思えますが、これから先の生活への不安は決してぬぐい切れてはおりません。避難所として活用された事務所の2階には、今年2月、復興庁の気仙沼支所の事務所が設けられましたが、いつまで事務所を設けるのか、勿論目途はないとのことです。生かされた命、少しでも多く方の希望と笑顔のためにと、同伴してくださいました境県議とともに「今」を歩んでおります。

最後に、職場の皆様、友人、家族、私を支えてくれている皆さま、普段口にはしませんが、いつも感謝しております。震災当日の朝、亡くなった母と挨拶さえも交わさず仕事へ向かいました。「当たり前」は続くものだと過信していたのです。毎日些細な事でケンカをし、親孝行どころか感謝の気持ちを伝えることさえも出来ず、あげく、いつも心配ばかりをかけていました。なに1つ返すことが出来なかった母に、「お母さん。私はあなたの娘に生まれて良かった。ありがとう。私はあなたのように強く生きる。泣き言は言うまい」とこの場を借りて伝えさせて下さい。

愛甲　香純

約40人の避難者と過ごしたセンターの前で

八木田　文子（66歳／宮城県石巻市）

石巻市にある自宅は津波の被害を免れた事から、ご子息の剣道仲間で被災した3家族10名を受け入れ合計13名と共に自宅で避難生活を送り、食べ盛りの子どもへの食事の提供など2ヵ月にわたり支援を続けられました。

●推薦者　保積　陽子●

大地震の後、自衛隊のヘリやボートで避難場所に移ってきた孫の剣道仲間の家族達を我が家の被害状況が床下浸水だったので、避難所から狭い我が家にきてもらった。

避難場所である学校の3階の教室から、家も車も、そして人もどんどん流されるのを見たという。食べ物は「かっぱえびせん」数本を皆で分けて食べたと。我が家は3人家族だが、その日から4家族大人6人、子ども7人計13人の共同生活が始まった。

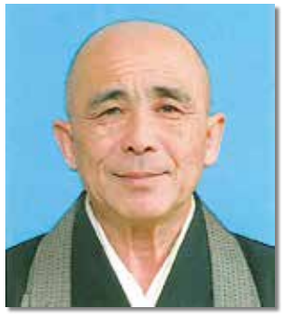
この子ども達に、何としても食べさせなくては。水道も電気も止まったが、幸いプロパンガスが無事で、何とか13人で協力しあい、その日その日を生きた。海沿いに住んでいた私の兄夫婦の遺体が、14日目に発見された。泣いている暇などない。我が家にいる、避難して生きている人々のほうが大切だった。

3.11から10日ぐらい過ぎて電気がついた。それから1週間ぐらいで、水道がでた。寒い雪の降る寒い中、もう給水車に並ばなくて良くなった。大きいスーパーで店頭販売が開始された。主にカップラーメンが、並んでいた。生鮮食品はまだ売っていなかった。そして一家族ずつ帰り始めた。

6月、何気なく新聞に目を落とすと東日本大震災に関する「ありがとうの詩」を募集するという。何気なく応募した詩が優秀作品に選ばれた。もうすぐ、その本が販売され利益は全額震災復興に役立てるという。私も少しでも復興に役立つことが出来るんだという思いで嬉しかった。

そのとき、封筒が届いた。社会貢献支援財団から表彰される事は、恥ずかしいけど嬉しい。我が家に避難しにきた方々にこのことを話したら、自分事のように喜んでくれました。

13人が共同生活を送った



北村　泰秀（63歳／宮城県石巻市）

石巻市で経営するお寺の幼稚園で、震災後530名もの避難者を受け入れ衣食住の支援を２ヵ月間に亘り続けられました。

●推薦者　社団法人　宮城県私立幼稚園連合会　理事長　村山　十五／宮城県知事　村井　嘉浩●

去年の3月11日午後2時46分、今まで経験したことのない強い地震に見舞われ、一瞬頭の中が真っ白になってしまいました。

その後の対応に追われている中、津波警報が発令されたので二番目の園バスの子、預かり保育の子どもたちを園に残すようにしている間に避難者が押し寄せて、混乱状態に陥りました。

地震発生50分後に津波第一波が押し寄せ、多数の人々が濡れて上がって来たので、更なる混乱を招き、パニック状態でした。

寺と園から衣類、布団を提供し、昔ながらのストーブ8基に点火し暖を取りました。

津波到来後に園児の祖父が参り、自分の孫と3人の園児が車ごと流され高台にいるので助けてくれとの要請があり、教職員三人が救助に向かいました。当園は海岸から1.5キロの地点にありますが、その参道入り口から70m先まで波が到達していました。

そのような過酷な状況の中、道路は瓦礫で山積みになり、目的地まで山沿いの竹藪等を歩き、園児4人を第二波の恐怖を感じながら、無事救助した次第です。

雪が舞い散り一段と寒さも増し、避難者も530余名になり、保育室10室とホールが満杯になり身動きが取れない程で老若男女、生後20日位の新生児や当時の園児も20数名居り、まずは、小さい子に寺でおにぎりを作り分け合って食べさせました。

530人余りの避難者を受け入れた法山寺幼稚園園舎

その夜は、ライフラインも途絶え、余震が続く中、余りにも多くの人々で横になることも出来ず、蝋燭の明かりで眠れぬ一夜を過ごしました。

避難所の指定を受けていないので自活を強いられ、2日目から水の確保、食糧の調達などに動き、水産加工会社から冷凍魚を頂き、園所有のバーベキュー用の鉄板を出し、燃料は、園の渡り板を燃やし飢えを凌ぎました。

飲料水は、タンクの残量分しか無く大切に使い、生活用水は防火用水を使い、命を繋ぎ、4日目の夕方に自衛隊が登って来て、幾分の光明が見え始めました。

避難所を閉鎖するまでの2ヶ月間、一職員は連日、他の職員は交代で園に泊まり避難者の世話をし、その上、重機、小型ダンプカーのリース料も当園で負担し、出来るだけの支援と協力しました。

私達の行ったことは当然致すべきことで、今回の表彰の栄に浴することは、恐縮の至りであり、反面大変光栄に思います。誠にありがとうございました。

今後は、未来を担う子どもたちの為に精進し、石巻復興に向けて頑張って参りたいと思います。

北村さんが住職を務める法山寺

小國　詔正（60歳／岩手県上閉伊郡大槌町）

大槌町の高台にある自宅に、住民60名近くが避難。ご夫妻で1ヶ月近くに亘り、この方々の衣食住のお世話などの支援を続けられました。

●推薦者　公益財団法人　社会貢献支援財団●

東日本大震災の当日、私は隣町の（釜石市）病院で透析を受ける為に病院に着いたところで、この世の終わりかと思われる大地震に見舞われました。

最初に頭をよぎったのは、津波ということより家屋被害（瓦屋根）のことでした。それも私が瓦工事業を営んでいたからです。

それから大津波の大きな被害を知って、家内のことや五月に出産を控えた石巻市に住む娘一家の安否が気にかかったが、連絡の取りようがなく、透析を受けながらも悪い方にばかり考えてしまい、生きた心地がしない時を過ごしました。

その後、ようやく高台にある家に帰ってみると、家の外に津波から逃れ避難してきた50～60人達で溢れていました。自宅が、避難所と化していました。

お年寄りの方も多く、夜中のトイレの世話が大変な中で助け合って過ごし、いつとなく役割分担が決まり、気丈に頑張り一日一日を過ごしました。

そこには、誰にも打ち明けられない気持ちを内に秘めながら、頑張っている姿を見るとやるせない気持ちでいっぱいになりました。

そうこうしているところに、全国からの支援物資や心温まる励ましの言葉をいただき皆に笑顔が戻ってきました。時がたち、それぞれこれからの行き先が徐々に決まり一人減り、二人減り、我が家での避難所生活の終わりが見えてきて、この先の一歩を踏み出せたと思うとうれしく、その反面寂しく感じました。

一カ月で避難所生活の終わりが来ました。いろいろ考えさせられた日々。その後、皆さんからの感謝の言葉をいただき、少しは役にたったんだと感じました。被災したことにより、近所にいながら挨拶程度で暮らしてきたことが、集団生活の難しさの中から、人間の付き合いの楽しさや有り難さに気付かされました。

あの大津波からあっという間の一年だったと思う人もいれは、まだあの時がとまったままと感じている人もいるのが現実です。仮設住宅での厳しい生活を余儀なくされている現状に私は、ただただ見ているだけで腹立たしさを覚えます。

私も事務所を津波で流され、自宅が避難所となり忙しい日々をすごすことであまり不安を感じる暇もなく、日が建つにつれ仕事をしなければと焦りを感じ始めました。

今は、建築設計事務所として、家内と二人で頑張っています。

この度の受賞の話をいただいたときは、誰でも私の立場になれば、人々に救いの手を差し伸べることが当然で、特別なことじゃないと思いましたが、これを機に人のために何が出来るのかを考え、復興の手助けをしたいと思います。

これからは、全国の皆様からの支えを力に、明日に向かって頑張って行きます。

中

50人に自宅開放

「家失った人 ほっとけなくて」

岩手県大槌町の小国詔正さん(六)と、息子さん(三)と夫婦は、津波に襲われて行き場を失った五十人の住民たちを最長で一カ月、自宅に泊めた。ただ「ほっとけない」という思いだった。被災者のために食料を調達し、急病人を運んだこともあった。(阿田憲)

夫婦が住む大槌町安渡地区の高台は、津波でがれきとなった家屋や漁船が押し寄せて周囲の道路が寸断され、三十軒ほどの家屋が孤立した。

高さ二十五のがけを伝い登って高台に避難してきた五十人の住民に、息子さんが「うちに入りなさい」と声を掛けた。

「お年寄りも子ども連れもいて、ほっとけなくて」。八畳と十畳の和室二室と洋室、庭の十五畳ほどのプレハブに分けて泊めた。布団は近所の人たちから借りた。

震災前日、詔正さんが三十キロの米を買っていたのが幸いした。女性たちがわき水をくみ、まきストーブと鍋で米を炊いた。

瓦職人の詔正さんと妻の兄雄男さん(三)で仮設トイレも建設。一週間が経過し、食料が尽き始めると、男性たちが山道を片道十分かけて、最も近い避難所に物資を受け取りに行った。

波風がなかったわけではない。夜中に仮設トイレの場所が分からないお年寄りが、庭で用を足してしまう。道路が復旧した後、せんそくが悪化した女性を病院に連れて行き、駆け寄った一歩手前と診断されたこともあった。

「昔ほど町内の付き合いがなくなり、知らない人も多かった。でも、非常時で助け合うことができた」と息子さんはしみじみ語る。

避難者の一人で、自宅が焼きれた小国孝子さん(三)は「震災の日は水が凍るくらい寒くて、家に入れていただき、命を救ってもらった」と、感謝する。

四月に入り、避難者は少しずつ親戚の家や別の避難所に移動した。震災からちょうど二カ月後の十一日に最後の避難者を見送った。「少しは人の役にたったのかな」。静かになった民間で、詔正さんと息子さんはほほ笑み合った。

虹 いま 寄りそう

小國さん宅から臨む大槌湾

小國さんご夫妻

大槌湾から見上げる小國さん宅

堀内　ツグエ（64歳／岩手県宮古市）

宮古市の避難所となった小学校で、かつて同校の給食を手伝っていた経験を活かし、400～500人近くの炊き出しをする等の支援を5月まで続けられました。

●推薦者　宮古市立赤前小学校　／宮古市教育委員会　教育長　佐々木　敏夫●

地区民への恩返し

このような大きな賞を頂き身に余る思いでいっぱいです。赤前に活きる私たちは今までも津波を経験しており、そのたび誰もが自分に出来ることを一つひとつやってきました。私も中学生の頃チリ地震津波を体験し、地域のみなさまにお世話になったことを覚えています。

あの日は今までにない地震に「津波」を直感しました。水門を閉める作業から戻った息子が、「とんでもない津波だ」と言い残し、消防団の活動に戻りました。私はとっさに家にあった食材を抱え避難所になっている小学校に駆けつけました。道々、波から引き上げられた人が運ばれるのが見えました。学校では先生方がお湯を沸かし湯たんぽを作っていました。私は以前小学校の調理場で働いたこともあり、学校には使われなくなった給食調理施設が在ることを知っていました。

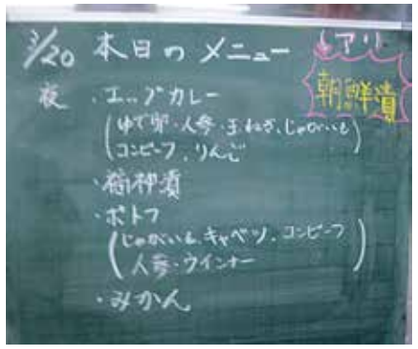
先生に、今も使えるのか伺いました。先生方が調理室を調べ機材は使えることが分かりました。ただ、水道が止まり水が使えない状態でした。

近くに自家水道が在ることを話すと、男の先生方が早速水を汲んできてくれました。女の先生方や用務員さん、駆けつけた地域の人たちとご飯を炊きおにぎりを作ることにしました。余震が続き何度もガスが止まりましたが、その度に、復旧させながら暗い調理場で作業を続けました。

炊いては握り釜を洗っては炊くという作業を朝まで続けました。その間、男の先生方や地域の方々も夜通し水を汲み続けてくださいました。なんとか小学校の体育館に避難している400人を超える皆さんに、小さなおにぎりでしたが食べて頂くことが出来ました。その後、消防団の方が神社や公民館にも避難している人が居ることを知らせに来ました。小さなおにぎりを手渡すと、雪の中に駆けだしていくのが分かりました。

給食調理用の機材を使い炊き出し

3月12日の朝の食事作り



毎日の献立決め

避難所や、消防団の方々など600人分ほどのおにぎりを握りました。作り終えたのは朝の4時近かったと思います。1・2時間休み6時頃から朝食の準備を始めました。だんだん明るくなってくると、一緒に働いているのが近所の人だったり先生だったりすることが分かってきました。誰もが一生懸命でした。私も赤前の一人として出来ることをやるだけでした。避難所のみんなに、食べるものだけでも何とかしたいという思いで調理場に立ち続けました。

そして、調理場を支えるために男の先生方や小学生・中学生・地域のみんなが雪の降りしきる中水を汲み続けていました。4日目の朝に初めておにぎりが届きました。冷たくなっていましたので釜で暖めて出すとそれだけでみんなが喜んでくれました。

その後自衛隊の炊き出しが始まりましたが、赤前地区は高齢者が多くなかなか食べてもらえませんでした。調理場にいた仲間や先生方も心配し、食材での配給を受けみんなで普段の食事を作ってみることになりました。大したものは作れませんでしたが、みんなも喜び調理場を続けることになりました。避難所の中からも調理場で働く人が出てきて、みんなでやることになりました。避難所が解散する5月18日の朝食まで続けることが出来たのは、みんなのおかげだと思っています。みんなに「チームツグエありがとう」と感謝され、食べて頂いたことを私の方が感謝しております。

今、学校ではこの調理場を使って炊き出し訓練を行っています。微力ですが学校からのお誘いを受け一緒に参加させて頂きました。これからも地域のために自分に出来ることを続けていこうと思っています。

避難所の様子

物資を地区民へ配給

佐藤　一彦（48歳／宮城県仙台市泉区）

仙台市で半壊した自宅を、被災した一人暮らしの学生のべ50名に開放し、衣食住のサポートをされた他、75000点にも及ぶ物資を集め、166か所の避難所等に届けられました。

●推薦者　佐藤　一彦●

大震災の後、国内外1,600名以上の方から、約8万点の物資とご協力（ボランティアのべ860人、宮城県内外14市町の避難所・仮設住宅のべ166箇所に配布）を頂きました。受賞にあたり、あらためて感謝申し上げます。今後もスポーツを通じて知り合った地域や仲間から丁寧に話を聞き、「必要な時に、必要な場所へ、必要な分だけ」をモットーに、再び安全にスポーツを楽しめるよう、活動を展開したいと思います。

われわれ大人はコミュニティを再構築し、10年かけて瓦礫を片付けます。その後の10年は、いまの子どもたちが日本を変えていきます。そうした10年後に活躍する人材を育てるため、スポーツを通じて心とからだを鍛え、勉強も一生懸命やる子どもの健全育成への手伝いを続けて行こうと思います。

スポーツイベント開催等を積極的に行いました

大災害で子どもは、遊び道具や遊び場所を失いました。その上、ストレスが募る保護者の下で長く我慢を強いられています。こうして抱えてしまったストレスは根深く、ほとんどの子どもたちにイライラ、夜尿、子ども帰りなどといった精神的ストレス（＝PTSD）が見られます。回復には外遊びやスポーツが有用であり、震災直後から地域の子どもや保護者、高齢者等も一緒にスポーツをするよう、積極的に継続的に声掛けを行い、以下の運動指導でストレスを和らげました。

- 『チャレンジデー』開催（主催：笹川スポーツ財団『がんばっぺ！宮城』を合言葉に5月、3,238名参加。）
- 南三陸町少年野球チームの練習場確保と交流試合（6月～、110名参加）
- 名取市サッカーリーグ交流試合の開催支援（7月～、400名参加）
- 東松島市仮設住宅内で『子ども遊びリンピックinみやぎ』開催（10月、140名参加）
- オリンピアンを招き『オリピックデー・フェスタ』を開催（主催：JOC、11月、200名参加）

未来を託す子どもたちの心を育てる活動を行っています

半壊した自宅でしたが、郷里から離れて生活する被災大学生（のべ50人）へ避難所として開放し、衣食住の提供、メンタルサポート、帰宅支援などを行いました。

また、スポーツ少年団の団員には、奉仕精神の醸成と復興活動の手助けとなる実践を経験するため、指導者・団員・保護者、近隣住民が仮設住宅等へ赴きスポーツイベントを通じた交流を行うなど、2011年4月から現在も被災者支援事業（運動靴、靴下、衣類、防寒具、飲料水、電池、スポーツ用品、基礎化粧品等の物資提供）を行っています。

スポーツ少年団での活動の様子

国内外から集められた物資を支分け、避難所へ届けた

菅野　修（58歳／岩手県陸前高田市）

陸前高田市の指定避難所ではない市のスポーツドームに自主避難してきた200人近い避難者に、個人で集めた物資や器材を使った救援活動を行い、自主警備や衛生管理等を徹底し、モデル的な避難所の運用を8月まで続けられました。

●推薦者　岡田　耕吉●

この度の受賞にあたり、全国の支援してくださった方々、避難所運営に協力して頂いたスタッフに心から感謝したいと思います。

さて震災当日、地震の規模から津波は来るだろうとは思いましたが、市が壊滅状態になるとは、予想もせず。営業していたスポーツ店から市施設のスポーツドーム（サンビレッジ高田）に、社員全員が避難致しました。

施設は、指定避難所になってはおりませんが高台にあり、前年の南米チリ沖地震の際にも、かなりの方々が避難されておりました。嘱託職員1名では、対応できかねていた状況も把握していたため、スタッフとして、協力も兼ね避難先としました。

当日は日中のため、かなりの人数の出入りがありました。サンビレッジからは、市街地の様子は見えないので、避難をしてきた人から、壊滅状態で戻れる状態でないことを知りました。避難してきた人の中には、お年寄りはもとより、0歳児、身障者の方、さまざまな方が、おられました。

もとより、避難所の指定になっていない多目的スポーツ施設ですから、暖房、調理場はもちろん、アリーナに敷くブルーシートでさえありませんでした。雪も降ってきました。役所との連絡も取れない中、避難してきた方々に手伝っていただき暖房の準備、食料、飲料の調達、避難者の名簿作成（200名位）と思いつくままスタートしました。

その間、発電機をお借りして、施設内の小部屋に暖房を入れ、子供、お年寄りに入っていただき、車のライトで室内の大鏡に反射させ明かりを灯しました。食料は、避難してきたブロイラーさんのトラックから、飲料は、自販機メーカーさんの車から確保し、多少なりとも空腹感をしのぐことができました。

右からシャワー棟、洗濯場、風呂

指定の避難所ではなかったが多勢が避難してきた

談話中

調理場も設けられた

翌日、避難されている方々に、長期戦になりそうな現状や指定避難所ではないことを伝えました。したがって、鍋釜等もなく、暖房を入れると屋根の皮膜が結露して余震でスコール状態になることなど説明し、移動希望のある方は移ってもよいこと、残られた方々で警備班、調理班、掃除班、救護班等の組織を作りたいことなど話しました。（組織は、14日立上げ）

その後は、連絡のつく会社の取引先、全国の友人や知人を頼りにし、調理器具、衣料、

食料等々、避難所の施設の充実を図るべく、支援の依頼を致しました。避難者の人数は、その後の出入りも含め、最終的には120名程が、いただいたドーム型テント42張りに、それぞれの家族ごとに入居しました。また山手に、水源をみつけホース、4トンタンクを支援していただき、600メートルほど水を引き、洗濯、シャワー、風呂、水洗トイレにと利用し、避難所独自で生活ができるようになりました。

避難所内では、流失した高田松原再生を願って女子会が、一本松プロジェクト、若手男子が伝統ある七夕祭り実行委員会を発足させ、全国に情報の発信を始めるなど全員協力し家族的な雰囲気で生活しました。

8月10日最後の避難者が、仮設住宅に入居し、運営が終了いたしました。

今回の避難所運営で実感したのは,「進取果敢」という言葉です。即断即決が運営の決め手でした。現在も、支援にたくさんの方々が訪れサンビレッジには、子供達の声が響き、併設された仮設住宅の方々ともども一歩一歩、復興に向けて生活しております。

全国の皆様に衷心より感謝申し上げると共に、今後も御支援賜りますようお願いいたします。

ありがとうございました。

スポーツ施設内

テント42張りに世帯ごと入居して避難生活を送った

佐藤　宏
（38歳／宮城県登米市津山町）

遠藤　一彦
（43歳／宮城県本吉郡南三陸町）

南三陸町の1500人という大所帯の避難所で、住民たちを統率し、ルール作りなどでリーダーシップを発揮するとともに、それぞれの職業の知識を活かし、自家発電や汚水処理などに取り組み、避難所の快適な環境の整備に尽くされました。

●推薦者　山内　亜由美●

私が、避難所の総括責任者として今回受賞できました事は、とても光栄ですし、「自分のやって来た事は間違っていなかったんだな」と感じています。

ただ、私がいただいて良いものかと大変恐縮しております。　大震災当日は、避難住民で混乱している中で、「どのように、避難住民の安全を確保するか?」また「どのように、水や食料を確保するか?」だけを考えていました。

周囲の方々にご協力を頂き、何とか水や食料を確保する事ができましたが、他の避難所にも送る事を考え、避難住民の方々に状況を理解していただいた上で、配給制限をし、乗り切る事ができました。

また、怪我人の応急処置、窓口運営、避難住民や施設の安全確保、食糧配給方法、関係各所との折衝など様々な対応に追われ、今思い出しても、初めの一週間は地獄の様な日々でした。

当時私は、環境水処理施設の運転維持管理をする会社に在籍していました。避難所であったベイサイドアリーナには、非常用自家発電装置があったので「発電装置を有効に使用する事は出来ないか?」と考え、配線の改造を行い照明や浄化槽を運転し、仮設トイレからの汚水を処理できる様にしました。その時は、職務上の経験が役立ちました。

町災害対策本部　左：町長

南三陸町ベイサイドアリーナ外観

アリーナ入口に貼り出された遺体の情報

食事の配給時に、中高生が「自分達も何か手伝いたい！」と志願してきてくれた時は嬉しくもあり、頼もしく思えました。将来この経験を活かし率先して南三陸町を牽引して行く人になってくれるものと信じています。

震災から四日後に、自衛隊の方々が、災害救助で来てくれた時は、正直「助かった…」と感じました。

大震災から南三陸町は少しずつではありますが、確実に一歩一歩前へ進んでいます。それでも、復興への道のりはまだまだ長く険しいものです。私も微力ながら復興に向け協力していきたいと思います。

全国の皆様には、震災当初から心暖まるご支援をいただき大変感謝しております。

南三陸町ならびに各被災地は、復興に向け頑張って行きますので、引き続きご支援いただきます様、よろしくお願い致します。

佐藤　宏

震災当日、家族の安否を確認した後、ベイサイドアリーナに向かいました。避難されていた人数は、わかりません。職員も少なく騒然としていました。

私は、他の避難所のことが知りたくて、中学校に向かいました。

情報収集を済ませ、アリーナに戻ってきてからが大変だったのを思い出します。備蓄してあるものをどのように分けるか、明日からの食料をどうするか。本当に長く、不安な夜でした。

夜が明けてからは、いろいろと問題が山積します。トイレや電気の事など、話せばきりがありません。私は総務として、手伝わせていただきました。避難されていた方々からの苦情、相談、お願い、いろいろありました。亡くなられた方々の収容方法や安否確認など。

そんな中、私のような者の言うことに耳を傾け、（避難者のみなさんが）協力して下さったからこそ乗り越えられたと思います。

震災から一年が過ぎ、今は漁業復興のため漁師をしています。有志12人と生産組合を立ち上げ、これまでにない漁師のあり方を模索しています。震災で全てを失いましたが、私達にはこれまで培われてきた技術があります。それを生かし、水産業の復興に繋げて行きたいと思っています。それが水産の町、南三陸町の復興につながると確信しています。

最後に、震災で亡くなられた方々のご冥福を心よりお祈りいたします。

遠藤　一彦

鈴木　廉
（14歳／岩手県陸前高田市）

鈴木　みゆ
（10歳／岩手県陸前高田市）

お父さんが復興の湯で共同浴場のボランティア活動を続けるなかで、中学生の廉君と小学生のみゆさんは一緒に浴場に出かけ、風呂桶の掃除や、貸し出しタオルの洗濯などの作業を、学校が始まるまで毎日、1日300名近い利用者のために続けられました。

●推薦者　鵜浦　昌也●

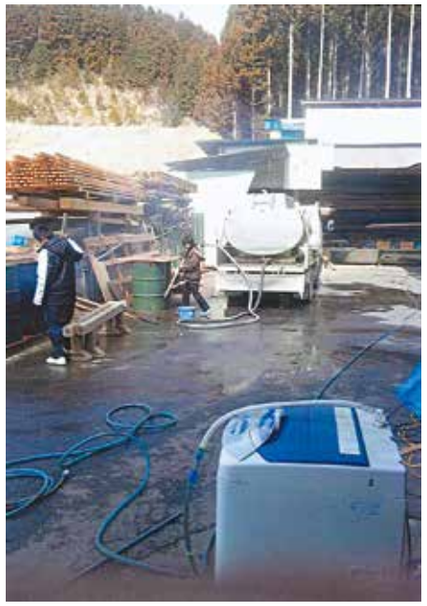
震災十日後、おフロ作りから手伝いを始めました。水も電気もガスも無く、何日もおフロに入っていない大勢の人のためにと、父の勤め先の社長さんが作ることにしたそうです。

仕事で使う足場板でフロ枠を作り、その中にビニールシートを張ったおフロ、そこにドラム缶で沸かしたお湯を水中ポンプで送って作るおフロ。学校が始まるまで毎日手伝いに行きました。朝一番はおフロの水をぬき、浴槽のそうじ。その後、洗濯したタオルを干して、乾いたらたたみ、タオルの補充など少し寒かったけど毎日がんばりました。

「広いおフロで助かったよ」と子供連れの家族。「ゆっくり入れたよ」とお年寄り。疲れきった体で来る消防団。大勢の人の食事や片付け、お世話が終わってから来る避難所のスタッフ。「遅い時間までありがとう」、「何日ぶりで入ったおフロ、気持ちが良かったよ」、「疲れが取れたよ」、「心も体も温まったよ」と、毎日色々な人がたくさんの笑顔で「ありがとう」と言ってくれました。

今回表彰を受けることになって、初めて少しでも誰かのためになる事が出来たのかな、と嬉しく思いました。

たくさんの悲しい思いや、辛い体験もしました。地震の音や揺れ、海を見るだけで、今でも恐い気がします。それでも、陸前高田で将来、人の役に立つような事をしたいと思っています。



ドラム缶でお湯を沸かします

浴槽のそうじ

浴槽のそうじ

兄妹で協力してタオル干し

金野　光晃（66歳／岩手県陸前高田市）

震災発生時には陸前高田市で体の不自由な男性を担ぎ、救助するとともに同市の大石地区で、復興の湯プロジェクトの本部長として、多くの避難者や、行方不明者を捜索する方々の為に半年近くにわたり入浴支援をされました。

●推薦者　鵜浦　昌也●

このたびは、市議会議員の鵜浦昌也氏のご推薦を頂き、公益財団法人社会貢献支援財団より、突然の表彰のご案内を頂き、驚きと喜びで身に余る光栄に存じます。

さて、3月11日午後2時46分、歴史史上最大規模のM9.0の巨大地震が発生し、その後に、市消防署の防災無線放送により大津波警報が発令されたので、我が家の裏山に避難しました。

ところが、近所の男性が我が家に歩いて来るのを発見したので、家に戻り、その男性と裏山に登ろうとしたところ、自宅から約100m手前の気仙川から津波が堤防を越えたのが見えたので、迫りくる津波を背に男性を裏山に引っ張り上げ難を逃れました。

その後に巨大津波が押し寄せ、目の前の自宅は勿論、近所の住宅がことごとく破壊、流失し、また、住宅が燃えながら流失するのを見て、山火事が発生しなければと心配でした。

男性は、体格が良い方で糖尿病を患っており、歩くのも大変な状態でした。山へ登る途中で低血糖を起こし、身動きが出来なくなり、「俺を置いて早く逃げろ」と言われましたが、男性をおいたまま逃げることはできないと思い、「頑張れ」と声を掛けながら、肩に担いだり、手を引くなどして山道を越えながら、約2km先の高台の避難所である第一中学校に辿り着きました。その後に、助けた男性と巡りあう機会があり、涙ながらにお礼の言葉を頂きました。

避難先は、第一中学校の体育館となり、避難者が1,000人以上を越えておりました。10日以上もお風呂に入ることが出来ませんでしたが、わが部落内の高台にある共和建設の高萩善夫社長が、3月下旬頃にいち早く工場内にボランティアでお風呂を設置してくださり、避難者が利用できるようになりました。

全国各地から届いたタオル

その後、第一中学校の下にある被災した、大石公民館と七夕山車車庫をボランティアの皆さんが瓦礫の撤去等を行っていただき、4月中旬頃に共和建設の高萩社長のご協力により、浴槽を七夕倉庫に移動して、近くの湧水からパイプで水を引きタンクに溜めながら、お風呂の水を確保することができました。

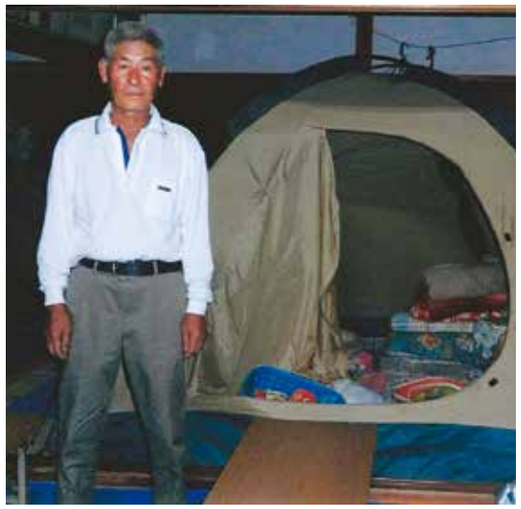
お風呂に必要なボイラー・タオル・石鹸等は、全国各地からの支援を頂き、灯油は市役所から支給されることになり、やっとの思いで「復興の湯」を立ち上げることができました。入浴時間は、正午から午後の10時までとし、多くの被災者及びボランティアの皆さんに入浴していただき、1日平均200名、多くて300名の利用があり、大変喜ばれました。

私も「復興の湯」の鬼の本部長と言われながら、公民館の中で「テントでの寝泊」をしながら、多くのボランティアの皆さんのご協力により、9月10日の「復興の湯」の解散に至るまで、本部長として孤軍奮闘しました。

この間に、全国各地から寄せられたご支援と多くのボランティアの皆さんのご協力に対し、深く感謝を申し上げます。本当にありがとうございました。

現在は、親子2人で空き家の仮住まいをしておりますが、陸前高田市の早期復興と高台への県営住宅や市営住宅の早期建設を希望しております。

手前に救助した男性の家が、奥に金野さんの家があった
後ろの裏山に男性を引っ張り上げた



テントで寝泊りして復興の湯本部長として頑張った

多くの被災者を癒し役目を果たした復興の湯

太田　明成（45歳／岩手県陸前高田市）

陸前高田市で経営していた飲食店は津波で総て流失、避難所で活動する中、靴の必要性を思いつき、ツイッターなどを通じて呼びかけ、77か所の避難所に1万6千足の靴を配られました。

●推薦者　鵜浦　昌也●

「16,000のありがとうを配って」

私の店「カフェフードバーわいわい」は、平成21年11月にオープンしました。営業できたのは、1年と4か月だけ。開店資金であった1,000万円ほどの借金だけを残し、店は流されました。それでも、家族が無事でいてくれたことが全てで、そのことを悲しいと感じたことはありませんでした。私よりも大変な思いをされた方々が、まわりにはたくさんいるのですから。

それは、3月11日の震災から10日目ぐらいの事でした。早々に、衛生用品や衣類、暖房器具などが物資として配られる中、みんなが口にする「着のみ着のまま」始まった避難生活。…ふと思いついたのが「くつ」の必要性でした。

3月28日に自分のブログに書き、ツイッターで広め、募集期間の約2週間で全国から1,000人を超える協力者を得ました。集まった「くつ」は、最終的に16,000足を超えていました。

避難所の方の手を煩わせることのないよう、サイズ分けをし、運び、また持って帰る。それを繰り返しながら、市内全域77か所の避難所をまわりました。

当時の陸前高田市は、物資の受け入れを一時的に中断していて、全国の皆さんも「どこに」「何を」支援すればいいのか？分からない状態だったと思います。

私の元に届いた2,000以上の段ボール箱のほとんどに、手紙が入っていて「負けるな」「見守ってるよ」など応援メッセージもありました。こちらとしては、「ありがとう」という感謝の気持ちで一杯でした。

ブログで「太田に」「くつを」とはっきりと伝えたことと、マッチしたのだと思います。そして、おねだりをした私も「ありがとう」であり、高田市民もまた「ありがとう」でした。

私は、橋渡しをしただけに過ぎません。全国の方々と被災地の方々と、双方を思いやる気持ちが、私を動かし、大きな活動に発展したのだと思います。

私は、皆さんの感謝の気持ちを忘れることなく、今も活動をしています。

再開したお店

店内の太田さん

私がこの表彰を受けるころ、陸前高田市に一つの商店街ができているでしょう。

「商店街」＝「ショッピング」ではなく、コミュニティーの場として、年齢男女を問わずいろいろなイベントを行いながら、楽しく地域の人たちと繋がれるような、場所づくりをしたいと考えています。

私たちの町が、今後どのようになるのかはまだはっきりとしていませんが、20年後の先を見据え、そのために、今何をすべきかを考え、行動していきたいと思います。

震災から1年が経過しましたが、これからも永遠に、日本国民がひとつの気持ちでいられればと願っています。

復興へ向けて

靴を選ぶ人たち

全国から寄せられたスニーカーに関るメッセージ

佐々木　平一郎（66歳／岩手県宮古市）

宮古市の赤前地区で、津波で避難するなか車椅子の高齢者を救助。また同地区の避難所の体育館を仕切りのない避難所として統率され、円滑な同所の運営に携わられました。

●推薦者　宮古市立赤前小学校　／宮古市教育委員会　教育長　佐々木　敏夫●

その日まで

あの東日本大震災は、私たちの赤前に大きな被害を及ぼしました。世帯数が400戸余りの集落でしたが、半数ほどが流失し26名の犠牲者が出ました。今までにも幾度となく津波の被害に遭っていますが、想像を絶する未曾有の大津波でした。

あんなことが起きるとは考えもせず、3月3日は地区民みんなで避難訓練をしていました。所定の小学校の体育館に避難し、地区ごとに安否確認や子どもたちの引き渡しの訓練などをしていました。それから一週間後、あの東日本大震災大津波が襲ったのです。黒い波が防波堤をあふれ、家々を押し流す光景は未だ脳裏から離れません。

私は地区民生委員や行政連絡員をしていましたので、車いすの方や高齢者の状況を把握しておりました。ただならぬ揺れを感じ、車に飛び乗り障がいのある方を避難所に運びました。次は車を置き、もう一人の車の方を迎えに出ました。その頃には、けたたましいサイレンが鳴り響き、防災放送が津波の襲来を伝えていました。もう一人の方は避難所の近くでもあり、地区民が避難するよう説得しながら、車いすごと運んでいました。地区民の避難誘導を終え、高台から見たものは、幾重にも重なり牙を剥く黒い津波でした。家が軋み引き裂かれ重なり合って流され破壊され尽くしました。私の家も見る影もありませんでした。瓦礫と化した我が家を見つめ、雪の中に呆然と立ち尽くす地区民に、とにかく体育館に入るよう説得しました。私を含め目の前の出来事が、誰にも信じ得ぬものだったのです。

体育館に入ると避難民で溢れていました。学校の先生方や避難民が、怪我人や波に流された人の救護にあたっていました。

あの日から避難所である体育館に寝泊まりし、調理当番や清掃当番・トイレの水くみ当番など先生方と割り当てを決め、生活の向上を目指しました。

その間、転居者への罹災証明発行手続き、遠隔地の避難所でくらす地区民の消息確認等、行政との連絡調整を行いました。

5月には仮設住宅が完成し、入居者の割り当てや自治会の立ち上げなど一人ひとりが連帯感・所属感を持って過ごせるよう組織作りを致しました。学校の協力もあり各種ボランティア団体が、連日私たちの仮設住宅を訪問してくれています。まだまだ続くであろう仮設の暮らしに、少しでも潤いを持ち続けられるよう連携・連絡の役割を担っていきたいと考えております。

今、赤前では復興計画が作られています。赤前の高台に住宅が出来るその日まで、みんなと手を携え頑張っていこうと思っています。

このような大きな賞を賜り身に余る光栄に存じます。心からみなさまに感謝申し上げます。

仮設住宅自治会の総会で会長に就任

仮設住宅の住民とともに

避難した赤前小学校（左　窓が並んでいる建物）

鈴木俊一元議員の訪問に対応

中島　響（40歳／宮城県本吉郡南三陸町）

震災後鹿児島から南三陸町に移り住み、“南三陸を片付け隊”の隊長としてボランティア活動に従事。10年先まで支援したいと、「社団法人　よみがえれ南三陸」を設立、地域への長期的な貢献を目標に活動されています。

●推薦者　松島　裕　／株式会社M.BROTHERS代表取締役　宮脇　康敏●

4月20日、私は南三陸町に単身参りました。

あの日（3月11日）惨劇をＴＶで見て思い、3月末日「全てを捨ててでも、今行かなきゃ絶対後悔する」、そんな思いに駆られ勤めていた会社を辞職。4月18日に故郷鹿児島を後にしました。

南三陸町に入ると、そこは「本当にここは同じ日本か？」と思わせるほどの瓦礫の山々。4月下旬にもかかわらず未だに自衛隊・警察の方が、行方不明者を必死に捜索されていました。

そんな折、私は被災した町を片付けていく中で、沢山の町民の方々と出会い、そして密に接する機会を頂きました。最愛の夫・妻・息子・娘を亡くし、今まで何十年もかけて築き上げてきた全ての財産を流され、そして町民の方々が、さまざまな津波を体験し疲弊困憊されている姿を見ているうちに、私は「この町のために何かできないだろうか…」「でも、いったい何ができるのだろうか…」と自問自答するようになりました。

（滞在して）4ヶ月が過ぎる頃、知り合ったボランティアの方から、「私達はこれで地元に戻りますが、地元へ帰ってからでも何か出来ることはありますか？」、「南三陸町復興の為に何か支援したいのですが…」といったメールや手紙・言葉を頂きました。

活動現場にて

ボランティアセンターにて

朝のボランティアミーティング

そして、大きい瓦礫が片付き、秋鮭漁が解禁となった10月。南三陸町に携わり、そこで出会った企業やボランティアの方に背中を押して頂く形で「一般社団法人・よみがえれ南三陸」を設立させて頂くことができました。

当法人では、町内における雇用促進事業、南三陸海産物の販売促進や水産関連インフラ整備事業、仮設住宅を中心とした福祉に関する支援事業、今回の震災において露呈された（ボランティアのあり方）長期ボランティアの活動支援事業等を行い、東日本大震災で被災された町民の方々が、少しでも早く、近い将来「自立」できる為のサポーター的な役割で長期的ご支援を行っていく所存です。

誰も経験したことがない。誰も答えを知らない、この未曾有の大災害を経験された被災地の方々の少しばかりでも下支えと成れるよう精一杯努力して参ります。

最後に、この度社会貢献者表彰という素晴らしい賞を受賞するにあたり、ご尽力頂いた方々、合わせてその礎となった被災地で出会った全ての皆様方に対して心より厚く御礼を申し上げます。本当にありがとう御座いました。

雇用創出のため家内労働のあっせんも行う

故郷の鹿児島の野球少年から南三陸町の野球少年達へ寄せ書き

片付け作業中

早坂　本勝（67歳／福島県南相馬市）

南相馬市の僧侶として、震災翌日から９月末まで、毎日市内の体育館等の遺体安置所に赴き、630名もの犠牲者にお経をあげ、ご遺族から感謝の声がよせられました。

●推薦者　財団法人　警察協会●

感　謝

大震災から一年が過ぎました。何か夢のように一年が過ぎてしまいました。

大震災の翌日、南相馬市役所の広報でボランティア募集案内放送が流された。私は何かをしなければと思い、すぐさま和歌山県白浜のお寺の住職で、同志の先輩、長橋啓運上人に電話で相談した。そしてすぐさま市役所に向かった。

あのう…私は高齢でお坊さんなので力仕事などは出来ませんが、お経を読むのが得意です。何かお手伝いをしたいのですが…というと、それでは遺体安置所の方へ行ってくださいと言われ場所を知らされた。急いで行ってみるとそこは高校の体育館で、もうご遺体が数十体あり唖然とした。

これは一体どうしたことなのかと理解に苦しんだが、大津波に飲み込まれ、横死されたご遺体なのだ。警察の方、消防団員の方、関係者の方達が詰めていたのだが、まだ3月だったので体育館はとても寒くて、冷蔵庫にでもいるようだった。毎日30体、50体と棺が並んだ。

ご遺族の方が身内の御遺体を捜しに来るが、なかなか見つけられずに肩を落として帰る人もあった。小生も寒いなんて言っていられない状況で頑張って一日5時間、6時間の読経が続いた。夜九時ころ帰宅して、食事して寝るだけの毎日が続いた。ご遺族、ご遺体の事を思うとお寺にじっとしていることが出来なかった。

無我夢中で一ヶ月が過ぎた四月中旬頃、安置所が変わった。小生の小庵から東方4、5kmの県スポーツセンターに移ったのである。これをきっかけに車で行っていたのを、徒歩で行く事にした。徒歩の往復中にお題目を心で唱え、安置所では約2時間の読経、往復一万二千歩、私は「弔いの行脚」と名付けて続けた。真夏の暑い日は、ヘロヘロになって歩いた。

夏も終わりご遺体の捜索も難航し、新たな発見も無くなり9月になった。夢中で読経して来たので、月日の経つのも忘れていた。ハッと気が付いたら、もう秋の彼岸になっていた。もうそろそろ自分の気持ちに区切りを付けなくてはならないと思い、係りの警察官に挨拶して読経を終了した。実に、6か月半にも及んだ。

しかしその後、安心したせいか体調が悪くて困った。病院で診察して頂いたら、血圧が上昇して上が200を超え下も150を超えていた。薬を頂いて飲用しているが、なかなか下がらず原因もわからず困っている。

そんな時「惨事ストレス」ということを知った。余りにも長い期間、異常な状況下に居た事によるストレスが原因ではないかと思った。今は、徐々に血圧も下がり、薬の効果が出てきたようだ。

福島原発の事故による放射能の事もあり、まだまだ当地方は、難題が山積みです。しかし、この度の社会貢献者表彰を受けることになり、大変に光栄に思っております。出家者としてあたりまえの事をしただけの事ですが、有り難くお受けします。出家者は生産者ではないので、只々出家の道を歩むことが大切だと思っております。お経を詠むこと、座して瞑想すること、それが愚僧の人生路と思っております。ありがとうございます。合掌。

体育館に運び込まれた棺

震災の翌日からお経を唱え続けた

片品村長　千明　金造

片品村

（群馬県利根郡片品村）

群馬県片品村は人口の２割にあたる1000人弱もの避難者を、福島県南相馬から受け入れることを、村長がいちはやく表明。受け入れの為予算１億円を確保し、167日にもおよび村をあげて避難者を支援されました。

●推薦者　社会福祉法人　片品村社会福祉協議会●

片品村では、村民をはじめ、受入れ宿・ボランティアの皆さんのご理解とご協力を頂き、福島県南相馬市の被災者や、親戚・知人での受入れを含めて1,000人を超す方々を、村内の宿泊施設に受入れさせて頂きました。

真冬の様な雪景色の中での受入れから、尾瀬の水芭蕉の見頃が過ぎ、暑かった夏もおわり、半年近くの長い避難生活となりましたが、片品村で暮らす決意をされた4家族を除き、最後の1人の方も9月29日、片品村を後に自立先へ向かわれました。

東日本大震災における片品村のいち早い受入れに対して、「片品村の出身者で良かった」「群馬県生まれを誇りに思う」等喜びの声や、「人に優しい片品村」「日本一優しい村」など、多くの温かい励ましの声を寄せて頂きました。

このような温かい励ましの声が、被災者支援に奮闘する一人ひとりにどれだけ力強く、励みになったことか計り知れません。

本当にありがとうございました。

長期間にわたる被災者受入れに対しまして、物心両面からご支援ご協力頂きました皆様に対して、心から感謝を申し上げまして、お礼とさせていただきます。

群馬県　尾瀬の郷
片品村長　千明　金造

卒業生を励ます会を行った

一時帰宅の時の様子

交流施設にて

交流行事

平成23年3月18日　南相馬市からの被災者を出迎え

代表　桐山　三智子

片品むらんてぃあ

（群馬県利根郡片品村）

片品村が受け入れた避難者は、村内の宿泊施設に点在していたことから、送られてきた物資の配給や病院や買い物への付き添い、情報伝達等の役割を、総勢150名の村民の有志で組織されたボランティアが行いました。

●推薦者　片品村長　千明　金造●

片品村では、いち早く被災者千人の受け入れを表明しました。一番大変なのは、受け入れる宿の方々、役場の方々です。本当に苦労されたと思います。

そんな中「自分達も何か力になれないか？」と、自発的に集まったのが、村に住む若者でした。受け入れのサポートをしたい、被災者の方に、少しでも気持ちよく過ごしていただきたい。という思いから、若者を中心とした40人で「片品むらんてぃあ」というボランティアグループを立ち上げました。

思いだけが先走り、何をしたら良いのか、ボランティア経験もなく、役場との関係も初めての無知な若者たちでしたので、最初から大変なことばかりでした。すぐに「むらんてぃあ」を支えてくれる大人たちも集まってくださり、役場の猫の手的な活動から始め、各宿に書類を配布、全国から送られる物資を仕分け・配達、病院送迎、フットワークが軽いところだけが取り得、何でもやりました。

当初1ヶ月の受け入れ予定が3ヶ月延長になり、その頃から学校や仕事が始まり、手伝えるメンバーが減ってしまいました。

そんな時、「むらんてぃあ」に加わってくれたのが、被災者である南相馬のみなさんでした。そこで県の緊急雇用の費用で被災者の方を「雇用する」という支援を始め、病院の送迎や点在した宿を結ぶ巡回バスを運営、みんなが集まれる憩いの場を開設。南相馬の方々に自分達で運営していただけるような仕組みを作り、生活支援・自立支援へと活動をシフトしていきました。

約半年の間に「むらんてぃあ」に登録してくださった方は村民92人、村外の方59人、多くのご支援をいただきました。その後も延長は続き、9月に村は避難所としての役目を終えました。それと同時に「むらんてぃあ」も役割を終え解散しました。

すべてが始めての経験で至らないところも多々あったとは思いますが、当初の思いを常に忘れることなく無我夢中で続けてきました。「むらんてぃあ」は解散しましたが、名前がなくても何かあればすぐにみんな集まれる。様々な経験を共に乗り越えた仲間との絆は確かなものになりました。

これからの時代を創っていくのは若者です。このような素晴らしい賞をいただき、私たちにとってとても励みになり自信に繋がりました。これからも片品村で仲間たちと共に協力し支えあい、村や社会に貢献できるような暮らしを築いていきたいと思います。

最後に「片品むらんてぃあ」を支えてくださったすべての皆様に御礼申し上げます。

片品むらんてぃあ
代表　桐山　三智子

あがっせ祭で

お掃除隊です

卒業生をはげます会

理美容サービス

ハッピーレストランへようこそ

会長　中原　義隆

社会福祉法人　福岡市身体障害者福祉協会

（福岡県福岡市中央区）

震災直後より仙台市障害者福祉協会の要請により３月末日から27日間に亘って、宮城県の福祉避難所に職員のべ10名を派遣し、避難所生活が不可能な障がい者や高齢者の介添えや介護をされました。

●推薦者　財団法人　仙台市障害者福祉協会●

未曾有の大災害を生じました昨年の東日本大震災より、一年が過ぎました。

あらためて犠牲になられました方々のご冥福をこころよりお祈りいたしますとともに、被災地の一日も早い復興を願っております。

このたび、福岡市身体障害者福祉協会の活動に対し、社会貢献者表彰の栄誉を賜り、誠にありがたく心よりお礼を申し上げます。また、今回当協会をご推薦いただきました、仙台市障害者福祉協会にも衷心より感謝いたします。

振り返ってみますと、震災直後、同じ「日本身体障害者団体連合会」の会員である仙台市障害者福祉協会の阿部一彦会長へ連絡をとりましたところ、運営施設が福祉避難所に指定され、被災された障害者や高齢者を受け入れているものの、多くの介護職員も被災していることに加え、24時間の運営体制が不可欠とされるため、要員が不足している状況とのことでした。障害をもつ方々の日常生活における介助や障害特性に応じた生活支援には、専門性を活かした支援が必要ですから、これは大きな問題でした。

ほどなくして、厚生労働省より福岡市を通して「社会福祉施設等に対する介護職員等の派遣依頼」があり、仙台市への派遣希望を申し出ておりましたところ、すぐに仙台市の福祉避難所（宮城野障害者福祉センター）へ派遣要請を受けました。

すぐさま仙台市障害者福祉協会と打ち合わせを行い、震災後間もない時期でしたが、現地までの移動手段の確保も目途がたち、3月末より職員を2名1組として1週間ずつ、のべ10人を約1か月間派遣し、福祉避難所での支援活動に協力をさせていただきました。

避難されてこられた一人ひとりの状況を知れば、すさまじい経験をされた方ばかりであり、その中で現実にできうる限り精一杯の支援活動を行いましたが、大災害時という困難な状況の中では、避難された方々にとっては充分なものとは言い難い部分もあったことかもしれません。

我が国は地域により気候的・地理的条件も種々で、それに起因する災害も様々だといえましょう。福祉避難所という存在は、これら災害時には、障害者や高齢者にとっては欠かすことのできない重要な社会資源であること、また、それを充分に活かすのは、日頃培われた人と人との繋がりやネットワークであることを改めて強く認識させられました。このたびの災害緊急時における福祉避難所での避難者された方々の生活や実際の支援活動を通して得たものは、派遣職員のみならず当協会全体としても貴重な経験となっております。

今後も、当事者団体として障害者福祉の一層の向上に努め、また、受賞の栄誉に恥じぬよう努力を続けて参ります所存でございます。このたびは誠にありがとうございました。

社会福祉法人 福岡市身体障害者福祉協会
会長　中原　義隆

皆で体操を行う

利用者に里心がつかないように工夫され、窓が覆われている食堂

代表取締役　山本　敏裕

株式会社　山本清掃

（京都府京都市伏見区）

京都市から瓦礫等の処理のため業界を代表して被災地を視察し、撤去作業の際の注意点や被災地の住民感情に配慮した作業を心がけること等を業界に提言。従業員の方々は、ボランティアで瓦礫処理にあたった他、古着を義援金に替える「みんなの着もちプロジェクト」を立ち上げました。

●推薦者　銭本　護●

東日本大震災で被災された皆様に衷心よりお見舞い申し上げます。先般、わたくしが被災地の岩手県を訪れ、実際にこの目で、この肌で感じたことを少しでもお伝えしたいと思います。

3月11日。大きな地震とそれに伴う津波の影響により、東北地方太平洋沿岸部を中心に甚大なる被害をもたらしたことをTVの報道を通じて知りました。翌日もそのまた翌日も、映像を通じて被災地の様子が届きます。

その惨状を知るにつれ、居ても立ってもいられない気持ちになりながらも、「自分にできることは何か？」、そんな自問自答を繰り返すばかり。そんな中、社員から提案があり、集めた古着を義援金に替えて贈る、『みんなの着もちプロジェクト』をスタートしました。

多くの企業様や個人の方から順調に善意が寄せられましたが、それでも「自分にできることは何か？」という葛藤は続きました。おそらく日本中で多くの方が同じ思いであったのではないでしょうか。

そんな私のもとに、全清連（全国清掃事業連合会）から、「環境省から支援依頼があった」との一報が入り、支援部隊への参加要請がありました。私は参加を即決し、先遣隊として当社部長の髙井、他県の全清連のメンバーとともに岩手県へと向かいました。髙井は阪神淡路大震災の際にも支援活動に参加した経験があり、私にとってこれ以上ないパートナーです。

そこで私たちが見たものは、報道で知る知識をくつがえすほどに甚大な被害を受けた被災地の現状。目を覆いたくなるほどの被害の実態でした。先遣隊として岩手県に3日間滞在し、被災地の状況を見てまわり県と国の関係セクションの要職の方とミーティングを終えて京都に戻った私たちは、社内で支援活動への参加希望を募りました。多数の社員が志願してくれましたが、通常業務との兼ね合いもあり代表2名を選び、私たち（山本・髙井）と計4名が現地へ向かうことを決定しました。

当時はまだ、東北地方では強い余震が昼夜問わず頻繁に起こり、また数日前に先遣隊として現地入りした際に感じた恐怖感、思わず立ちつくすような光景が鮮明に記憶に残っていたため、社員の心意気に目頭が熱くなる一方で、「彼らはもちろん、その家族のために絶対に安全を担保しなければ」という義務感はとてつもなく大きなものでした。

潮と泥と生ゴミと（消毒薬代わりに撒かれた）石灰が混じった何とも言えない匂い、ゴーグル無しに目も開けられないほどのホコリ、自然の猛威という言葉が陳腐に感じられるほど何もかもがぐゃぐしゃになった街。そして4月とは思えぬ身を切るような寒さ。テレビでは知ることのない現地の様子です。しかし、これらの身の縮む思いは結果として私を奮い立たせました。ずっと抱いた葛藤を払拭させてしまうほどに衝撃的なものでした。生涯忘れることはないと思います。

私たちの支援地は大槌町でしたが、宿泊地は盛岡市内で、毎朝片道3時間以上かけて往復しました。これは安全確保のためだけでなく、被災地近辺にボランティアが宿泊することで、自衛隊や警察の活動の障害とならないようにする意味もありました。現地に行った人間誰もが感じると思いますが、自衛隊や警察無くして、この震災の復興はあり得ません。彼らの存在が、被災地に安心感と規律を与え、不安な生活の中で落ち着きを取り戻す要因となっているようでした。

毎朝6時に宿泊地を立ち、車両基地まで2時間、そこから大槌町まで1時間かけて辿り着きます。そしてひたすら震災ごみの処理に当たりました。重機を極力使わず、丁寧に作業することが求められました。そして瓦礫の中からアルバムなど思い出の品であろう物を見つけた時には、専用のカゴに入れて作業に立ち会う住民の方に委ねました。

自衛隊が奮闘している、警察も役所も休日を返上して動いている。そして被災された方の懸命な姿。自分が体感すればするほど、現地で活動を続ける方々に敬意を抱かずにいられない。それが被災地の本当の姿でした。

「現場で見えた光」

ある日、作業を終えた私たちが避難所に立ち寄ると、近くにいた女性の方が、「ご苦労さまです。本当はお茶でも出さないといけないんだけど、何もなくてごめんなさいね」と声をかけてくださいました。厳しい寒さの中、僅かな食料と毛布1枚で耐えておられる被災者の方から、逆にそんな優しい言葉をかけていただき、疲れ切った身体に力がみなぎったことは言うまでもありません。同時に、自分が逆の立場になった時に果たしてそのような心遣いができるかと思わず自問自答していました。

支援物資は届かない、着のみ着ままで難を逃れた人々が強いられた状況の深刻さは想像を超える苦難の日々です。そのような状況下で私が目にした希望。それは子供たちでした。瓦礫の上で無邪気に遊ぶ子供たち。危険だと思うよりも、私は復興への確かな道筋が見えたような気がしました。子供たちの笑顔は被災地の最大の明かりです。彼らこそ日本の未来である。本当にそう確信しました。

京都に戻り、私をはじめ支援活動に参加したメンバーが自分たちの体験を社内に伝えたところ、嬉しいことに多くの社員が『みんなの着もちプロジェクト』のために一斉に古着を持って集まってくれたのです。

同僚が目の当たりにした凄まじい自然災害の様子やそこで感じた思いを共有することで、皆が何か出来ることはないかと考えて行動してくれた結果でしょう。再び私は目頭が熱くなりました。同時に、経営者として自社の危機管理体制の見直しと、全社をあげて防災意識の高揚を図ることを心に誓いました。

「みんなの着もちプロジェクト」の立ち上げ

今後、被災地の復興には長い年月がかかります。支援は一時的なものであってはなりません。私も山本清掃という会社もその点を踏まえて長期的な活動に入ります。まずは『みんなの着もちプロジェクト』を推進し、少しでも多くの義援金を継続的に捻出できるようにしたいと思います。

株式会社山本清掃
代表取締役　山本　敏裕

業界を代表して被災地を視察し、瓦礫の撤去作業には被災者に配慮した作業を心がけた

代表取締役　綿引　薫

石塚観光
（茨城県水戸市）

茨城県で観光バス会社を経営することから、水戸から宮城県へのボランティアバスを現在も運行。利用者は国内のみならずアフリカ・トルコ・インド・イギリスからも。また、並行して何もなくなった仙石線の線路脇等に、菜の花を咲かせる運動や植樹をされています。

●推薦者　佐藤　穂貴●

昨年の東日本大震災は、私達の茨城県にも甚大な被害をもたらせました。突然襲った未曾有の大災害に、大混乱していたことを思い出します。停電する中で、たまたま観光バスを所有していた私達は、観光バスのテレビを利用し、情報収集に努めました。

そのテレビから映し出される映像は、現実とは思えない、あまりにも残酷すぎるものでした。私たちの茨城でも、立て続けにくる余震に怯えながら、ただ時を過ごしていましたが、報道され流れる宮城・岩手の映像には、あまりにも辛いものがありました。

弊社には気仙沼出身の女子社員がおり、気仙沼が火の海となっている映像に家族への心配が募りました。幸い一週間位後に、無事の確認がとれスタッフ一同安堵した事を覚えています。

そんな中、私自身、長年青年会議所（JC）活動を通して交流を続けてきた石巻が、甚大な被害を受けている状況を知りました。2週間位経って、やっと石巻の仲間達と連絡が取れた中で、改めて震災の及ぼした被害が、あまりにひどすぎる事を理解致しました。

そして、青年会議所の仲間と一緒に、取り急ぎ用意できた自転車や燃料など可能な限り持っていけるものを届けに行きました。長年交流し愛着のある石巻は、私の知っている石巻とは全く違う街になっていました。

しかし、そんな中でも石巻の仲間達は、自らも被災し家も流され、会社を失い、多くの友人や知人、身内を亡くしながらも、地元の為にいち早く立ち上がり、地元の方々の為に頑張る姿に涙が止まりませんでした。

そして、一番私が、お世話になってきた先輩が、津波で犠牲になった事を知り、もう涙を止める事は出来ませんでした。

その数日後、再度石巻に入り、一緒に作業を手伝いながら亡くなった先輩の為に…

石巻釜地区での作業

ボランティアバス

メッセージ付土のう袋

瓦礫拾い

そして頑張る多くの人達の為に何か出来る事は?…そう考え、茨城県社会福祉協議会さんの多大なる協力を得ながら始める事が出来たのが、ボランティアバスの運行でした。

昨年の4月29日に運行を開始させて頂いたボランティアバスは、茨城県内のみならず全国各地や海外からも多くの皆様に参加を頂いております。一年で約12,000名様のご参加を頂きながら、現在も運行を継続させて頂いてる事に、本当に感謝の気持ちでいっぱいです。

ご参加下さる皆様方以外にも、私達のボランティアバスを多くの方々が支えて下さっています。子供達が被災地に心を届ける「思いやりの心育成プロジェクト」に使う土のう袋は、青年会議所（JC）の先輩方を中心に2万枚以上の寄付を頂きました。

また被災地を花で彩る「夢いっぱい！愛いっぱい!花いっぱい!プロジェクト」や「菜の花大作戦」には、全国から多くの皆様のご支援ご協力を頂き、取組ませて頂く事が出来ています。

被災地の復旧復興は、まだまだだと感じています。被災地の方々に心からの笑顔が戻るその日まで…支えて下さる皆様と共に「邪魔だから来るな!」と叱られるその時まで、心を寄せながら、これからも取組んで参りたいと思います。

本当に支えて下さる、全ての皆様に感謝の気持ちでいっぱいです。

立ち上がろう茨城!日本中の笑顔の為に…
立ち上がろう日本!世界中の笑顔の為に…
心でつなぐ…「さわやかな風」作戦!

本当にありがとうございます。

石塚観光（石塚サン・トラベル株式会社）
代表取締役　綿引　薫

芝桜の植樹

野蒜小学校　秋　ひまわりが満開に

発起人　林　映寿

日本笑顔プロジェクト

（長野県上高井郡小布施町）

長野県の主婦ら100名を動員し、女川町700人に手編みの靴下カバーをプレゼント。支援物資の提供運搬や自転車を送る他、女川第一小学校で「筆遊び教室」を継続して実施。また、女川町で製造された商品の販売も各地で行っています。

●推薦者　社会福祉法人　小布施町社会福祉協議会●

日本笑顔プロジェクトは、宮城県牡鹿郡女川町での支援活動を継続的に行っております。長野県からの同メンバーが毎月女川町を訪れ、炊き出しや物資提供、マッサージ、保育施設や病院での風船アトラクション、小学校の授業の中で筆を使って楽しく字を書くといった学習支援など、現地ニーズを随時聞き取りながら幅広い活動を行っています。

毎月継続的に訪れ、町民の皆様と顔を合わせ話をする度に親近感や信頼性が生まれてきました。小学校での学習支援もあり、子供達とは、活発にコミュニケーションをとる事ができ、毎回多くの笑顔や元気を提供され、我々支援メンバーが逆に励まされています。

平成23年9月からは女川町に住む主婦の方が、自発的に同プロジェクトの現地支部を立ち上げて頂き、復興地と我々との太いパイプ役になって頂いております。絶えず変化するニーズを探るには、やはり現地と密接になる必要があると感じています。

また平成23年の夏以降、女川町の子供達に手編みの靴下カバーを贈ろうと、長野県を中心とした年配女性100人の編み物ボランティアを募り、約2,000足近い靴下カバーを制作しました。その活動や協力は全国各地へ広がり、使われなくなった毛糸も数多く寄せられました。

現在は、女川町で製造された自立復興商品の委託販売を行ったり、同町で製造された蒲鉾をチャリティー販売したり、同プロジェクトが発案したチャリティーグッズの販売等で支援活動費を捻出しております。

今回、大変名誉ある賞を受賞させて頂き大変嬉しく思っております。この受賞はいままで同プロジェクトに関わって頂きました大勢の皆様のお力添えがあっての事と改めて感謝しております。今後は、女川町での軽作業委託等で自立に関する支援や同プロジェクトの活動を国内はもちろん、世界各国へ発信し、「笑顔」の重要性と復興への意識を広めていきたいと思っております。

日本笑顔プロジェクト
発起人　林　映寿

筆遊び教室

炊き出しや物資提供を行った

女川町

マッサージ中

代表　森下　美貴

つるがしま東日本大震災復興支援プロジェクト

（埼玉県鶴ヶ島市）

埼玉県鶴ヶ島市のボランティアにより、気仙沼市で牡蠣の養殖を復活させるために、いかだの資材となる竹を提供した他、毎月瓦礫撤去のためのボランティアを派遣する等、復興に向けたプロジェクトを展開されています。

●推薦者　社会福祉法人　鶴ヶ島市社会福祉協議会●

SNSを通じての出会い

つるがしまTOWNTIPというソーシャルネットワークの中から立ち上がったプロジェクトが、このような大きな賞を受賞させていただきましたこと、心より嬉しく思います。

震災翌日に義援金の募金先として出来たプロジェクトでしたが、月日が経ち、義援金支援から活動の支援に変更して、様々な支援活動をしてまいりました。

4月の後半から宮城県気仙沼市唐桑町に漁民への支援で現地に入りました。

津波で流された漁具を山の中から見つけてきては、高い山へ運ぶ、日々その繰り返し。がれきの撤去、漁具の回収、桟橋の補修など、男も女も関係なく動きました。

水山養殖場という場所になん度も足を運び、牡蠣の養殖復興、雇用創出になるようにと杉の伐採をつるがしま里山サポートクラブの皆さんと一緒に行いました。

九十九鳴浜の周りの山や、舞根川奥の山林を伐採。山の川にかかる橋が欲しいと言われ　急遽、橋作りに変更になっても対応のできる素晴らしい仲間。

たくさんのボランティア団体に、200食からの炊出しも行なってきました。

牡蠣筏の材料になる竹を鶴ヶ島で伐採し、唐桑町へと送る活動は被災地へいかなくても出来る支援活動ということで、竹林の提供、伐採の手伝い、トラックへの積み込み等、地元のみなさんがたくさん集まってくれます。

インターネットで集まった年齢も性別も関係ない、そんな仲間とこれからも東北が笑顔になれる日まで、今後も、筏用竹の支援をはじめ、ニーズにあった活動を牡蠣養殖だけではなく　継続的に支援をしていきたいと思います。

この度の受賞は、鶴ヶ島の皆さんとの活動の励みになります。

本当にありがとうございました。

つるがしま東日本大震災復興支援プロジェクト
代表　森下　美貴

炊き出し

川に架かる橋づくりも行った

何度も足を運び漁具を見つけて運び出す

竹の伐採作業

漁具の回収

丁寧に手作業で漁具を回収